

KAPPA BOOKS



食人宴席

抹殺された中国現代史

ツェン イー
鄭 義 著
コウ ブン ユウ
黄文雄 訳

光文社
カッパ・ブックス

0007378718

はじめに

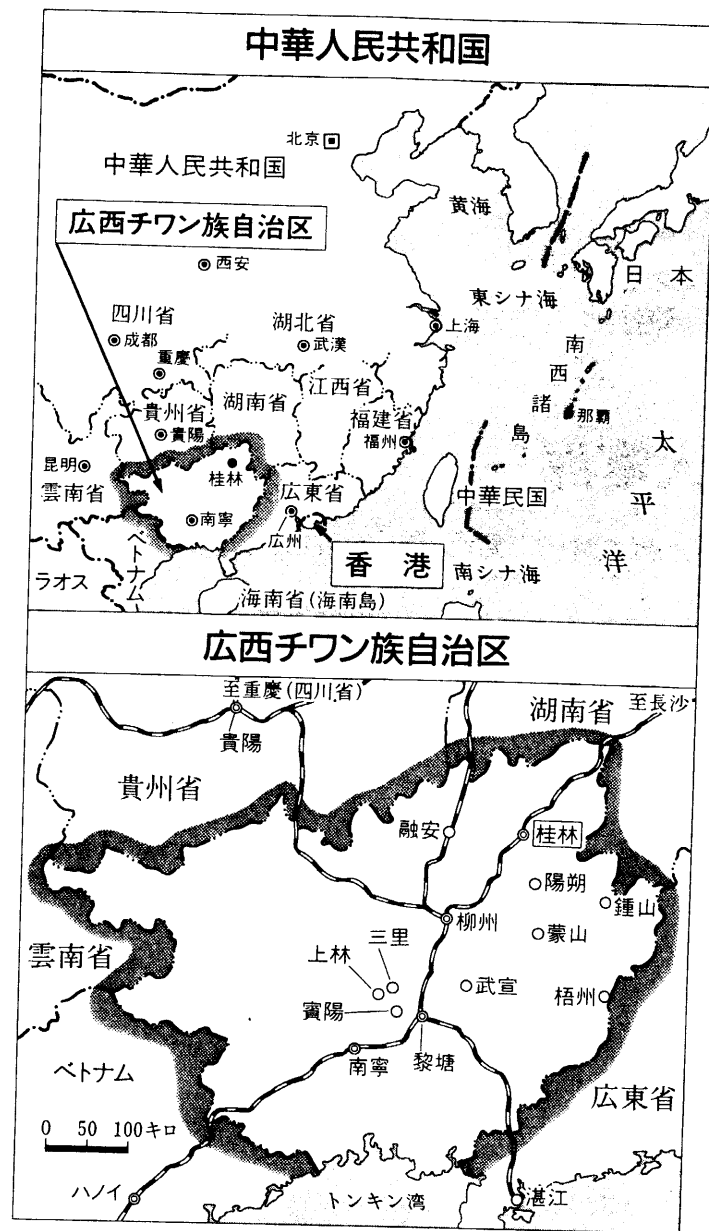
はじめに——日本の読者の方々へ

わが民族のための懺悔録
一九九二年のある小春日の朝、私と妻・北明の二人は暗い船底にうずくまって、船頭の足の隙間から波止場を眺めていた。停泊中のぼろ漁船も、雑然とした倉庫、旅館、居酒屋などの建物も、ゆっくりと遠ざかっていく……。

防波堤の向こう側の岬には、港湾警察と港湾局の小屋が見える。もうあと五分ほどで、迎えの香港漁船が姿を見せるだろう。茫洋たる南シナ海。ジーゼル・エンジンの響きと震動のなかで、私はしっかりと黒いバッグを抱きしめて、最後の運命の裁きをじっと待っていた。

このバッグの中には、六百ページにのぼる原稿が入っている。中国共産党当局が絶対、発売禁止にする事実を記録したものだ。われわれは、ついに中国大陸から脱出に成功したのだ。これからは、この凄惨な事実を語ろうと思う。

この原稿は、どんな読者も驚かせるにちがいない。著者の私自身でさえ、執筆中、何度となく



身震いして、ペンを握ったまま涙をおさえられなかった。しかし、過去の血塗られた行為は、決して私を麻痺させてはいない。私は身震いし、わが民族のための懺悔録を執筆しているのだ、と言いつ聞かせた。もちろん、自分が危険を冒していることも自覚している。

中国共産党当局者は、いつそう私に対する迫害を強めるだろう。それだけでなく、まったく悪意のない多くの同胞にも、私が「臭いものに蓋」という因習を守らなかつたということで、中国人が軽蔑されることになった——と責めるだろう（当局者は事実上、すでに数度にわたつて、この原稿のための取材ノートや資料を強奪しようとした。しかも、そのうえ、妻を逮捕し、最近の私の著作動向について訊問し続けた）。

だが、決意というものは、それほどむずかしくはない。私の義憤は、ある資料室の奥深くに綴じ込まれていた残虐行為報告によって生じると、もう地獄に落とされる恐怖をものりこえることになった。

私は、この懺悔の旅を歩むとき、決して孤独ではなかつた。曹雪芹（『紅樓夢』の著者）や魯迅のような先哲（昔のすぐれた思想家）は、私とともにいるからだ。個人としての懺悔、家族の懺悔、民族の懺悔……ただ天の父と良心に向かつて、正直に語り、悔悟（あやまちを後悔して、改めること）があつてのみ、われわれが救われるのである。

偉大なる宗教は、すべて懺悔を語る。天の父なる神を畏敬し、敬虔に懺悔する民族がはじめて

希望をもつものだと、私は確信している。

「広西大虐殺」事件——その残虐さの背景には何があるか

中国の歴史のなかの、現実のこのような血塗られた事実、決して民族的な因子あるいは人間性の欠落というようなものがある原因ではない。逆に、ただ残酷なる独裁政治が人間性をねじ曲げたことからくる歪みにすぎないと思う。たとえば、今日までの共産主義理論と共産主義運動の歴史は、人道主義に対する猛烈な攻撃を一度といえども、中止したことはなかつた。共産党の暴君たちは、徹底的に人間性を抑圧し、抹殺させることによつてのみ、人間が彼らの残虐なる権力闘争の従順な道具となり、より容易に人々をそそのかして野獣のように彼らの政敵に襲いかかることができることを、だれよりも十分に知っているのである。

文化大革命（一九六六―七六）に起こつた「広西大虐殺」事件の悲劇は、まさしく共産党の非人間的な理論の必然的帰結である。そのかされた「階級的な恨み」とか、「異なる政治的意見の人間」ということを理由にした「食人」行為は、人類の文明史上、かつてなかつた非人間的な犯罪にちがいない。赤い中国で生じたこの暴虐行為は、殺害された人数では、ドイツのヒトラーの集団虐殺にはやや及ばないとしても、その残虐さはファシストの及ぶところではなからう。

ある日、人類は「広西大虐殺」事件に対して、かならず莊嚴なる道德的裁きを行ない、このは

なはだ反人類的な行為を永遠に歴史の耻辱の柱に釘づけとするにちがいない、と確信している。

「天安門事件」と逃亡生活三年間

「広西大虐殺」事件は、本来、私が構想中の長編小説の素材にすぎなかった。しかし一九八九年の夏の「天安門事件」——北京で起こった虐殺とその後の全国的な大弾圧、逮捕、処刑そして、今日にいたる暴虐行為は、過去の残虐行為が今日なお、清算されていないことからくるものであることを痛感した。

そこで、私はもはや躊躇なく執筆し、歴史に訴え、その裁きを仰ぐべきことを決意した。

世界の人々は、中国人が社会主義制度下で体験してきた恐るべき実態を知ってこそ、われわれがいかに平和、自由、民主、法律制度に対する強い願望をもっているか——も理解できるであろう。いかなる歴史もひそかに現代の歴史創造に参加している。このようにして裁くことがあってこそ、われわれが未来において、より人間性に富む新しい世界を創出することができるのではないだろうか。

文革以来の波瀾万丈な人生——知識青年として農村に下放され、東北部（旧満州）、内モンゴル自治区を流浪、黄河流域の文学遍歴、チベット自治区、青海高原（青海省）の探察および、「天安門事件」以後の三年間の地下逃亡生活は、私自身の足跡が中国のほとんどの地域を遍歴し

たことを意味しよう。自然と社会での極端に苛酷な生活条件下で、豊かで自由そして尊厳ある生活を求める中国人が示した不屈な闘魂は、世界でもまれな壮大なドラマである。

今日までの中国の恐怖政治は、ごく普通の人間の温かさなど普遍的な道徳の喪失をもたらしたといえ、苛酷な社会で助け合うという人間愛は決して失われてはいない。第二回東京国際映画祭（一九八七年）のグランプリに輝いた『古井戸』は、まさしくこのような民族性を表現した、私の一つの試みである。

日本の読者の方々が、本書を通じて凄まじい、醜い中国人社会のなかにも人間的温かさのあることを理解してくれればうれしく思う。また、翻訳者の黄文雄氏には心から謝意を表す。拙作がこれほど早く、日本人の方々と対面できるのは、黄文雄氏の並々ならぬ努力があったからである。

さらに、すべての読者の方々にも感謝したい。ことに、われわれの蒙った苦難に涙する読者の方々に、心から感謝し、最大の敬意を表したいと思う。

一九九三年秋

アメリカ合衆国・プリンストンで

鄭

義

●目次

はじめに——日本の読者の方々へ 鄭義 / 3

1章 食人犠牲者たちの絶叫 / 13

●プロレタリア独裁のもとで展開された狂乱行為

プロレタリア独裁とは「階級の敵」を殺害することだ

夫の遺体に泣き崩れることは、犯罪である

全裸で吊り下げられ、陰毛を焼かれた十八歳の女性

名門・清華大学卒のエンジニア夫妻への残忍な殺人行為

小学校教師は、美人学生の内臓を狙って糾弾を要求した

食人犠牲者への補償は、肉五百グラム、ニワトリ一羽、菓子折一箱

2章 「広西大虐殺」の現場報告 / 61

●なぜ、残酷行為が公然と展開されたのか

男性性器を食べた革命委員会エリート未婚女性

お前は今夜、亭主の生首を抱きしめて寝なさい

食った人肉は地主の肉であり、特務の肉である

絶命するまで待ってくれ。性器は死んでから切断すればいい

3章 《人肉宴会》大流行 / 95

●暴君の統治下の愚民は、暴君よりもさらに凶暴だ

鄭義という人物には、極秘資料の閲覧を禁止せよ

《人肉宴会》——中学副校長は、なぜ教え子たちに食われたか

中学副校長は糾弾され、殴殺され、食べられる理由がなかった

狂乱の嵐にたった一人で立ち向かった男
私も、人肉を食べた者も、同じ文革世代なのだ
革命的人道主義の欺瞞——人間の良心を悪魔に渡す思想の悲劇
広西省から吹く風は、怨霊たちの遺恨の声だ

4章 周恩来首相への「告発状」／145

●「私は北京の元秘密黨員。一人の共産黨員の使命として……」

「告発状」執筆者は、中国共産党元秘密黨員だった
餓死者千九百九十七名——農業政策の失敗はだれの責任か
“右派分子”と宣告されて、労働改造農場へ追放
食人行為は、文革を汚し、党中央を汚した犯罪ではないか
王家三代は、現代中国史の輝かしい目撃者だ

5章 マルクス主義と孔子／181

●マルクス主義は、中国人の苦難の上にさらに苦痛を与えた

孔子思想は、歴代独裁皇帝の基盤だ
孔子は中国人の個性を抑圧し、悲惨な社会をつくった
マルクス主義は、衰退しつつある儒教に新血を注いだ
マルクス主義と中国土着の「大同思想」の共通項
労働者階級は、なぜ雑巾のように捨てられたか
マルクス主義は、中華民族を深い災難へ突き落とした

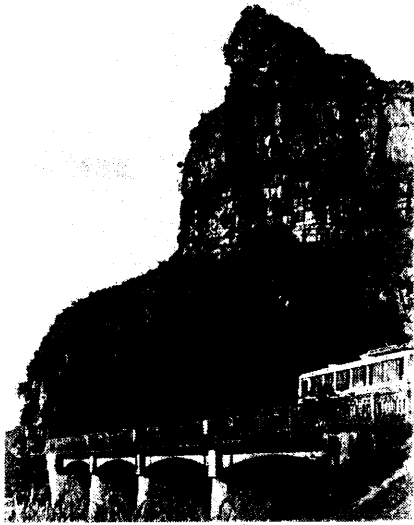
あとがき——訳者として 黄文雄／209

《著者・鄭義について》 黄文雄／212

1章

食人犠牲者たちの絶叫

●プロレタリア独裁のもとで展開された狂乱行為



「木山大虐殺」事件の瀧水橋現場

私は、なぜ重い十字架を背負ったか

一九六八年——私は文化大革命（以下、文革）のときに、広西チワン族自治区（以下、広西）桂林に一回行ったことがある。桂林市内および周辺拠点は当時、すでに文革の真ただ中で、紅衛兵たちによって占領され、騒々しい世の中であつた。私は、首都清華井岡山の紅衛兵として広西に入ったのだつた。

桂林は、山紫水明な景勝地だ。「桂林の山水は天下第一、陽朔の山水は桂林よりもすばらしい」という言葉がある。私はそのとき、船で陽朔へ行く予定だったが、初めて出会った友人に止められた。市街地を一步出ると、農村のいたるところで殺される危険があつたからである。当時は、三人以上の民兵が一緒になれば、たちまち人間の死刑宣告をすることができたのだ。

私はやがて北京に帰り、河南省の劉建勛革命委员会主任から広西のことについて、こんな話を聞いた。「韋国清（広西書記）という奴は、大したことはない。彼は、機関銃を頼りに対立派を消滅しただけのことではないか」。私は劉主任の話の意味については、あまり理解できなかった。しかし、天安門広場前の『大字報』（壁新聞）は、「韋国清が広西で十万人を虐殺した」と告発し、「広西では大虐殺が行なわれている」とも書いていた。

さらに恐ろしいことは、広西省で人間を食っているという噂も流れていた。それは人間の想像力をはるかに超えたことで、やがてこういう噂を聞いたこともある。ある地方では、その都市の全体が人間を食っていると、商務局長が人間の大腿部をかついで市街地を通つたとか、家に帰つて煮て食つたとか、その足はまだ靴下をはいていたとか……。

また、ある校長が学生たちに殴り殺され、人々はそれぞれ肉を分け、学校構内にレンガでつくれた臨時のかまどで焼いて食つた……などなど、いろいろと噂が流れたのだつた。

一九八四年——私は『広西文学』李斌編集長に出会つた。われわれは北京人民文学出版社の『当代』編集部との応接室で一緒だつた。すぐ仲のいい友人になり、どういふ話でも語りあつた。私は十数年前の「広西大虐殺」事件について、問題提起した。彼は少しばかり興奮して、その噂について事実だと語つた。彼はさらに、広西当局が少し以前に文革收拾工作組を派遣して、各地の食人事件について調べたことがある、と教えてくれた。李斌は真面目な作家でもあり、正直な兄貴分であつた。私は彼の話を信じないわけにはいかなかつた。

私はその後、ある偶然の機会に汽車の中で劉資雁（作家）に会つた。私は文革のときの「広西大虐殺」事件について、知っているかどうかを尋ねた。彼はゆっくりとうなずき、しばらく黙つていた。私は「先生は、この問題について執筆なさいませんか」と尋ねた。彼は「いや、これはあまりにも恐ろしいことで書きたくない」と答えた。

私はしだいに、このことについて書きたいと考えるようになった。しかし、確実な資料をまだ入手していない。私の予感では、それは決して偶発的に生じ、孤立した事件ではないように思え

た。もちろん、そうだからといってどう説明するか、私にはわからなかった。だが、私はそのときから、「広西大虐殺」事件の重い十字架を背負い始めたのである。

広西省の文革犠牲者は約九万人

一九八六年五月十七日——。私はとうとう広西へ出かけた。同行者は友人の北明^{ほくめい}。彼女は文芸理論を専攻し、文化人類学にもきわめて興味が深く、自由奔放でロマンチックな南方文化に憧れ、もちろん私と一緒に資料を集めるために、いい助手になるのではないかと思った。

しかし、二十世紀の一九八〇年代に、このような千一夜物語のような食人事件を追及するのは、精神病ではないかと思われるかもしれない。私は北明の宿泊ホテルを決めてから、北京の友人からの紹介で『中国法制報』（中国共産党・國務院司法部の機関紙）の章華仁^{ちやうかにん}記者を訪ねた。私は彼に私の目的を説明した。章記者は広西人で、すぐに食人事件が決して噂ではない、と話した。しかも私を公安局に案内してくれた。

五月十九日、私は彼の手配で広西自治区政法委員会の王冠玉^{おうかんぎよく}副書記と会った。私は新聞記者証を見せ、『中国法制報』紙と、中国作家協会の紹介状も添え、私の目的について、つぎのように彼に説明した。

「私が広西へやって来た目的は、文革当時の残虐事件について、とくに心理学の立場から、極左思想による人民への毒害を研究することである」

心理学は、たしかに真の目的を隠す口実とすることができた。私は心理学的研究という口実でほんとうの食人惨劇調査の目的を隠して、彼の警戒心を和らげた。

共産党というところは、自分の過ちを認めないもので、ことに作家や記者に対しては、真相を語ることを嫌がる。それが中国共産党幹部や官僚の一般常識である。

私の正式の身分と、『中国法制報』紙記者の紹介で、話がうまく進んだ。王冠玉副書記は、文革当時の話を持ち出すと、さすが自分の感情を抑えられなくなったようで、テーブルの上に資料の一部を取り出し、これは県人民武装部長がみずから指揮して、大量の罪のない群衆を殺害した証拠である。彼は死刑判決を受けた後、執行猶予になった。現在、下部組織から送られてきたこの資料は、五十四人を殺害したとなっているが、実際は二十六人だから、もう一回裁判をやり直してくれという要求の資料であるなどと話し、続いてこうも語った。

「中国共産党が当時、重ねて強調したことは、歴史問題についてはなるべく寛大に処置すべきだ。深く追及する必要はない。文革当時の事件は、殺された者はすでに殺された、裁判にかけるべき者はすでに裁判にかけられた、だから寛大でよい、というものだった。しかし、寛大にすればするほど、無実な人間が多くなるのだ」

この文革期間中に殺害された無実の人々は、広西省で約九万人といわれている。それにもかか

わらず、ただ十数人が死刑判決を言い渡されただけだ。

彼は最後に、私を紹介する手紙にサインして意見を述べた。広西省の整党委員会に私の調査活動を紹介することを約束した。私は彼に感謝した。広西省各地の取材と調査がスムーズにいくだろうと感じた。

私は、善は急げだ、いいチャンスだと思ひ、韋華仁記者の案内で、広西整党委員会に直行した。その後、文革問題処理委員会の于亜琴同志から詳しい話を聞いた。私は彼に大虐殺事件について尋ねた。彼は、隠さずによくつくりとくつかの実例を挙げて詳しく説明してくれた。彼は、武宣、融安、賓陽、上林、鍾山各県の名前を挙げ、大残虐事件を調べるのだったら、かならず武宣県に行かなければならないと、とくにそのことを指摘した。

私は翌日、南寧市の地方委員会へ行って、李副秘書長から賓陽、上林各県での取材許可を依頼した。韋華仁記者は、私に重ねて安全に注意するように、単独で行動してはいけないと念を押した。ことに地方取材は、かならず政府当局者と一緒に行かなければならないという。私は冗談半分に「いや、中国の文学史上、いまだ作家が食われたという先例はなかったのではないか」と語り、二人は笑った。

翌朝、私は北明と別れて、というのは、紹介状は私一人だけなので、彼女と一緒にいったら怪しまれるからだ。車で賓陽県まで行った。昨夜は大雨で、朝はとくに涼しかった。午前十時すぎ、車は盧墟（県政府の所在地）に着いた。午後、私は県紀律委員会の李増明書記と会った。「賓陽大虐殺」事件を取り上げたいと言つと、李増明は、不機嫌な表情を見せた。私は彼に一つ疑問点を尋ねた。

プロレタリア独裁とは「階級の敵」を殺害することだ

賓陽県史は文革後、新しく編集されてこう述べている。

「一九六八年七月末、県革命委員会王建勛主任（6949部隊副師団長）、王貴増副主任（県人民武装隊副政治委員）は「73指示」を貫徹するためにあらゆる人員を動員して、労働者階級の敵に対する猛烈な攻撃を展開した。全県で迫害され、殺害された者が三千八百八十三人、『73指示』を貫徹するために、それ以前に殺害された者が六十八人で、合計三千九百五十一人である」

……一九六八年七月二十二日、県革命委員会は「73指示」を徹底的に実現する会議を開いた。「賓陽大虐殺」はこのときから始まった。総指揮者は王建勛である。賓陽県は二十六日、プロレタリア独裁大会会場で二人を殴殺した。二十七日、街頭ひき回しデモで「四類分子」（反動、地主、富豪、悪質分子）十四人がつるし上げ糾弾闘争のあと、殴殺された。同日、県武装部は、幹部たちが殺人現場を見学した。二十八日夜十時、蔣河公社の呉某民兵連隊長が、各村の民兵に

呼びかけ、四類分子を逮捕して公社に集合させ、二十四人を集団銃殺した。同日、王建功は紅色恐怖をつくるために、いちばん賑やかな中心地区で、「二十三種分子」の批判糾弾大会を開き、群衆をそのかして、棍棒、石ころを持って、七、八十人を殴殺した。そのなかに、県立病院院長、副院長、および内科、外科、産婦人科、薬剤師主任などの知識分子が含まれていた。

二十九日午前、王建功は、県軍管区会で、政治法律幹部会議を招集し、殺人を推進するために、殺すべき対象、時間、手段、方法と目標などの具体的な指示をした。

彼は会議の席上でこう述べた。

「この一戦は七月二十六日から八月十五日までを一段落としてもらいたい。主要な闘争対象は、裏切り者、特務、死ぬまで悔い改めない走資派（資本主義志向派）と、いまだうまく思想改造されていない地主、富農、反革命分子、右派分子、さらに投機分子などである。県の重点は、新賓、盧墟の二カ所である。新賓は現在すでに幕を開いた。この任務を執行しなければならぬ。公然とは大会を開いてはならない。ただ、個別的に火をつけるだけでよろしい」

「群衆は、悪い人と思えば、彼らを『専制』しなればならない。『専制』とは、本来はプロレタリア独裁という意味だが、ここでの『専制』という意味は殺人、処刑である。あなたたちは、人民のやりたいことを阻止してはならない。運動が始まったところには、積極分子が何人かを銃殺することは大した問題ではない。しかしわれわれは彼らを銃ではなく、拳骨、石ころ、棍棒を持

って殴り殺すのが、群衆に対する教育の効果が大きい。賓陽県には現在、四千名の四類分子がいる。あなたたちは彼らを十数年かけて改造しても、私が見たかぎりでは、彼らは一人も改造されていなかった。人民があればほど精力をつくして彼らを監督しても、われわれがあればほど精力をつくしても、とうてい彼らを改造することができなかった。こんどの運動では、敵の三分の一か、四分の一を打ち殺さなければならぬ」

同じ日、王建功は、県革命委員会で、招集された全県各地区武装部長と、人民公社の民兵隊長の緊急会議で、消極的な幹部に対して圧力をかけた。

——地獄の門はこのようにして開かれた。紅い嵐はアツという間に、全県に吹き荒れることになった。民衆は歴史上、かつてなかった大虐殺の恐怖に陥れられた。殺人モデル会が開かれ、その後、全県百七十二個大隊で、大虐殺の嵐がうずを巻いたのである。この間、公安幹部の一部は、監察員として、全県各地で幹部の虐殺ぶりを監督し、しかも毎日、殺人の進展状況を報告させたのだった。県公社の指導部は絶えず電話をかけ、闘争の進展を報告し、指導部は闘争のあまりにも進まない大隊に対して圧力をかけた。弾薬をやたらに使うな、拳骨と棍棒と石だけ使え……。そのために何千人もの罪のない哀れな人間が、大虐殺の嵐の中で、殴られ、骨を折られ、血を流し、殺害されていった。

意識不明になるまで殴られ、絶命していく……

私は夕食後、盧墟の市場へ散歩に行った。市場は非常に賑やかで、ここでは狗肉（犬肉）を売っている。私は半斤（二百五十グラム）ほど注文して道端で酒を飲みながら肉を食べ、市場の賑やかさをながめていた。盧墟という街は、広西省南部の重要な物資集散地で、経済は非常に発達している。このところ個人経営者の景気が格別によくはやっている。ことに人々の注目をひくのは、街路のファッション店、果物屋、飲食屋、野菜売りだ。道路の両側には、屋台がずらりと立ち並んで、夜になっても非常に賑やかである。

今日のこの繁栄は、十八年前の悪夢と比べてみると、まことに理解できないほどだが、では、あの交通を妨げるほどの大虐殺のときの死体はどこへ行ったのだろうか。数字は、大虐殺事件を簡単に説明するだけのことで、人間を煽動し、脅迫し、あるいは人間の凶暴な、絶望的な心情、また殺害された、あるいは殺害、反抗するなどの人間心理とか、これらの人々の思想、情緒を理解し、解釈することは非常に難しい。これは、人間の運命であろうか。私は李書記の手助けのもとで、県裁判所・王所長、そして党紀違反処分を受けた幹部の黄華山——かつての賓陽中学校の紅衛兵幹部であり、彼はみずから四名の中学教師を殺害し、九名の元捕虜も殺害した人物である——彼らの談話を総合して、私はその当時の恐怖の雰囲気を感じ取った。

……批判闘争大会は、すべて町の中心部で開かれた。各世帯は、かならず参加しなければなら

なかった。「名簿」にしたがって、つるし上げられる人物が群衆の前に引き出されてくると、彼らの罪状を一つ一つ宣告する。罪状はきわめて簡単である。例えば某は反動學術權威、某は右派分子、某は党紀違反分子……ただそれだけである。罪状は、別に法律的根拠があるものではなく、最高指示にしたがっただけである。毛沢東はかつてこういうことを言った。

「専制、つまりプロレタリア独裁というのは、群衆の専制である」

つまり、罪状宣告後、群衆に大きな声で意見を聞くのだ。

「われわれは、これらの奴をいかにすればいいか」

その糾弾会場の群衆は、かならずみんな大きな声で叫ぶ。

「打倒しろ！」

「殺せ！」

かくて、群衆はどっと競って襲いかかり、棍棒、石ころで彼らを殴り殺すのである。

群衆は当初、殺害現場を見ようと、ものすごく多かった。しかし、毎日、人間を殺害するので、だんだん群衆が少なくなり、一方、街路上には死体がだんだん多くなり、死臭がただよいはじめ、そのため、群衆はますます少なくなった。「名簿」はすでに決められているので、糾弾集会は決して混乱しなかった。また、「名簿」に書かれた四類分子以外には、みだりに無実の者を殺す者はなかった。だからつるし上げられる人間と群衆は、ある距離を保ち、闘争者と非闘争者は、き

わめてはつきりしていたのである。

群衆は殺人にも参加したが、仇討ちではないので、少し殴ってすぐやめた。しかし、そのなかでもっとも残忍な者は独身者であった。あるいは軍隊から退役したごろつき、あるいは上部組織を喜ばせようとする走資派であった。また一部には、殺害に手をかして自分の立場を表明しないと、誤解されるかもしれない人たちが参加した。

群衆は、年齢から見ると、二十歳前後の青年がもっとも多い。十四、五歳の少年も少なくなかった。群衆がなかなか手を下さない場合は、あるいは下せない場合は、四類分子を動かして彼らを殺害させ、その後で幹部の民兵がこれらの人たちをまた殺害したのである。四類分子は、もうこの難を逃れることができなくなるといふことを観念すると、自殺した者も少なくない。

この犠牲者たちは、別に縛られてはいない。彼らはすべて逃げ場がないからである。生きる希望もなく、だから、いったん呼ばれると、おとなしい山羊のように黙々と死の道へ進み、許しも叫びも、ののしりも、弁明もしない。ただ表情だけはきわめて冷淡で、全く反抗意識がなく、地面にひざまずいて、人々に殴り殺されていくだけである。

地面にひざまずくように命令され、殴り倒され、またひざまずき、また殴られ、意識喪失まで殴られて絶命するのである。

反抗者たちの悲劇

私はいくつかの取材では、たった二つの反抗例を見ただけである。「賓陽大虐殺」事件のたった二つの例外である。これは、反抗者というものの悲劇の象徴でもある。一つは一九六八年七月三十一日夜、人民解放軍が熊世倫を射殺したケースだ。ある人が、熊の家では銃を隠し持っていると密告した。そこで糾察隊が彼の家へ調べに行ったところ、熊はドアを閉め、自家製の手榴弾を投げて抵抗した。しかし、爆発しなかった。当地の人民解放軍・6949部隊は、この通報を聞くと、すぐ二個大隊を連れて熊家を包囲した。その翌日午前三時、いっせいに踏み込んで、家族を全員射殺した。この家の中からは、何の武器も見つからなかったが、熊が抵抗したために、あえて見せしめのために全員射殺したのである。

同じ日、中興人民公社で行なわれた批判糾弾大会では、「名簿」にある農民の吳日生が現場出席を断わった。家に閉じこもって包丁で抵抗したので、頼増杰・武装部部长はその知らせを聞き、拳銃を持って民兵を引き連れて、吳を会場まで連れてきたのだ。ここに吳を殺害した人物の話がある。吳徳新は、会場でプロレタリア独裁、つまり「名簿」の人物を吳日生ら四人などと宣告し、四人の罪状宣告をした後、群衆の前に連れていって、批判し、糾弾し、殴り、蹴ったのだ。

「私は、包丁で吳日生の耳を切り落とした。この包丁は、彼を逮捕するとき、吳が使用して抵抗したものだ。私はつるし上げ、糾弾した後、吳を石ころで殴り、そのとき、妻は、子どもをおん

ぶして、さらに後ろから二人の子どももついてきたので、呉一家を殴殺した。もちろん、私が全員、殺したのではなく、私の後ろと周囲の民兵その他、多くの人々が石ころを持って呉日生一家四人を殴り殺したのである。その他の人物は、同時に民兵によって殴り殺された。呉日生を殴殺した後、私の心中はきわめて愉快であった。だからすぐ家へ帰って、ごはんをたき、いっぱい食べて、また殺害した人間を見物に行った」

夫の遺体に泣き崩れることは、犯罪である

八月三日、鄒墟同徳公社。批判された人物は十八名。各人は一本の縄を持って、公社前に集合させられ、罪状宣告のあと、各自が持ってきた縄で縛られ、棍棒で殴り殺された。死体は、独占江に投げ捨てられた。

ある生産隊の幹部は、畑仕事の最中に通知を受け、すぐ家へ帰り、着がえもせずそのまま、『毛沢東語録』と縄一本を持って出席し、その場で縛られて殺害された。彼は公社の幹部に対して「私は何の罪もない、私の命を助けてほしい、頑張って仕事をやり、子どもを養育するから許してくれ」と懇願したが、殴殺された。

人々は、絶望の中でつぎからつぎへと自殺した。そのなかでもっとも悲しいのはおそらく黄応基ではなからうか。彼は弟が絞殺され、もう一人の弟が殴殺され、妻が批判闘争にひっぱり出され、糾弾され、首吊りさせられた。黄応基は絶望のなかで、壁に頭をぶつけ、自殺しようとしたが、死ぬことができず、また斧で自分の首を切りつけ、それでもまた死ねなかつたので、最後に首吊り自殺して、やっと目的を達成したのである。

当時の雰囲気はまさに恐怖のどん底で、人々の死体を収集する人間がいなければならず、あって泣く人もいなかった。ある女性が、夫の死に泣きくずれると、彼女が背負っている幼児も引きおろされ、二人とも鉄の鋏で殴り殺されたのだ。彼女は夫の死を泣いたのだが、それは階級の敵に同情するということで、殺害されたのである。

群衆はみだりに人間を殺し始めたころ、何の理由なのかわからなかった。この騒々しい状況を見る子どももわけがわからない。死体が道路一面にあふれ、自動車が走れなくなり、広西省南部へ行く道路さえ断絶した。賓陽市内には人の血が流れ、死臭がただよい、そのとき人々はやつと恐ろしくなった。賓陽市内は夜に入ると通行人が途絶えた。賓陽民衆は恐怖の中で戸をかたく閉め、ひっそりと静まりかえったのである。

なぜ、「賓陽大虐殺」裁判は、行なわれないか

この「賓陽大虐殺」事件は、賓陽県史上、空前絶後で理解ができて許すことができない。賓陽県文革では、虐殺者の人数が広西全区で第一位である。抗日戦争のとき、日本軍に殺さ

れた人々は、全県で三百余人であった。これは民族の戦争である。中国革命の初期、匪賊が三百余人を殺した。これも銃を持つ敵に対する作戦であった。しかし、なぜ平和のときに、アツという間にその十三倍もの人間が人民の私刑によって殺されたのか、これは考えなければならない問題であり、避けては通れない問題でもある。

「賓陽大虐殺」事件は一九八三年、やっと十五年後になって、賓陽県当局が文革期間中に無実で殺され、あるいは迫害で亡くなった三千九百五十一人の全員を名誉回復し、県政府名義で死者の家族に対して名誉回復通知書を出した。しかし、この通知書だけで数千人の亡霊をなぐさめたことになるのであろうか。さらに遺憾なのは、共産党の政策が法律に優先したことである。つまり広西当局が、重ねて歴史問題はなるべく寛大に処理すべきであると指令したのだ。その通知が全県でわずか五十六人を裁判にかけ、そのなかでたった一人の死刑という結果を生んだ。そのことは、一人の人間の命と三千九百五十一名の命とが同じだということであって、これはあたかも社会と法律を皮肉るかのようなものであろう。

しかし、李增明書記は、私にもう一つの意外なことを教えてくれた。

裁判にかけられた人々は、自分たちが無実であるということを主張しているというのである。「賓陽大虐殺」事件の主犯は王建功であるが、今日にいたっても彼の裁判が行なわれていないのだ。この人物は、みずから大虐殺計画を実行した。彼は賓陽県の民衆を大虐殺しながら、共産党

員としての地位がだんだん上がり、広州警備区こうしゅうの第一副司令にまでの上り上がったのだ。最終的には光栄ある身分で引退し、今日は大きな邸宅で悠々自適である。裁判にかけられた人物はすべて小物である。もし火つけ役のそそのかしがなかったら、あれほど人々は殺害されなかったはずである。

最近になって、王建功が「賓陽大虐殺」事件の主犯であるということを証明するために、当時の日記、電話、会議記録が提出され、王建功指揮の、大量殺人犯罪が事実であるとの資料がまとめられて、中国共産党賓陽県委員会の名で提出されている。

この資料は、二十八ページにわたり、最後につきのように書いてある。

「……以上の大量虐殺の事実は、王建功が十分に殺人事件の主犯であることを証明することができ。被害者の数が多く、手段は残酷で、民情はきわめて憤慨し、その人物についてはすでに殺人罪を構成している。われわれの意見としては即時、逮捕して厳罰に処すべきである。中国共産党賓陽県委員会。一九八四年九月十五日」

李增明書記が私にこの告発状を手渡してくれたとき、私は、その資料の署名の月日が一年半前のものであることを発見した。つまり、賓陽県委員会は、この長い一年半の間、みずからこの告発状をつくっていながら、その受取人がいなかったのだ。ここは全く言論の自由、新聞の自由、出版の自由のない国である。私は、ただ一人の文化人に過ぎず、何の力もない。私は、ただこの

真実を記録して、われわれのあとの世代に残すだけである。私は、すでに罪悪に満ちあふれた黒いジャングルに入り、一つの血塗られた「紅色記念碑」（共産党記念碑）を見つけたということであろう。

全裸で吊り下げられ、陰毛を焼かれた十八歳の女性

一九八六年五月二十三日。上林県。私はこの日の夜、県党委員会の韋国全^{いこくぜん}宣伝部長の家で食事をした。私は南寧市の友人に頼んで、少数民族・^{チワン}壮族の何人かの友人を見つけ、彼らに食人事件のことについて尋ねておいた。上林県では、たしかに食人事件があっただけではなく、さらに人の肝も食った話がかなり多い。しかし、それを事件として残している資料は少なかった。

翌日、規律査察委員会の莫樹謀^{もじゆぼう}副書記と会った。彼に言わせると、上林県という地方は山々に囲まれた小さな県で、一九六八年七月以前には大規模な虐殺はなかった。しかし、一九六八年七月下旬から八月初旬にかけて、大派の民兵が、小派の拠点を攻撃して、この武闘で四人が死亡した。大派とは、当時の主にプロレタリア革命派連合指揮部に率いられた集団で、また小派とは反対派を指す。大派は人数が多く銃も多い。実力はきわめて強大で、かつ韋国清と人民解放軍の支持を得ていた。小派は、比較的規模が小さく、一部では軍隊の支持を得ても、滅亡の運命を避けることはできなかった。だから、その後、迫害され、虐殺されたのは、ほとんどが小派の人たちである。

上林県では文革当時、千九百六人が殴殺されている。一九六八年七月～八月の二カ月間で千百人が殺害された。この数字は当時、人口わずか二十六万人の小さな県では、大変なことである。つまり人口の〇・七パーセントが殺害されたことになる。それはまた、人を驚かせる「紅色記念碑」の一つである。

八月二日、大豊^{たいほう}（県政府の所在地）では、武闘犠牲者の盛大な追悼大会が開かれた。この大会では、階級の敵二十四人が殴殺された。つまり一人の犠牲者に対して、敵二十四人を殺害したのである。群衆は四類分子、二十三種分子と反主流派を犠牲者の棺桶のところまで連れてきてひざまずかせ、棍棒と石ころで殴り殺した。三日、巷賢^{こうけん}人民公社の追悼大会でも四十三人が殺害された。七日、人民公社木山大隊追悼大会でも七十二人が殺害された。

さらに、最大の集団虐殺事件が発生した。十七日の「ひと握りの階級の敵を打倒する」万人大会集会では、百六十七人を殺害し、広西集団虐殺記録をつくったのである。

上林県の食人事件は、莫副書記に言わせると、少なくともいのだそうだ。ただ、文革当時の問題処理の仕事は、非常に生々しく、また忙しいので、個別的な事件として処理し、それを明らかにすることは困難だということだった。彼が言及してくれたのは、木山、龍楼^{りゅうろう}、龍祥^{りゅうしょう}の実例だけであった。そのうち、龍祥大隊事件は、被害者が小派で、殺人者は、被害者がまだ生きているの

にナイフで肝を取り出し、しかも、肝を取り間違つて、肺を取り出したので、もう一度、肝を取り出しに行ったところ、被害者はまだ絶命していないで、目玉がぎよろりと動いていたという。この事件では、共産党員の首謀者の一人が八年の刑の判決を受けた。

高長大隊事件も、きわめて残忍である。大隊長兼政治保安主任の周某が、小派だといふので一家五人の党員を殴り殺したのだった。しかも周の十八歳の娘を、倉庫の上から真っ裸で吊り下げ、灯油で陰毛を焼き、そのうえ、四人で手足を押え、一人の青年民兵がみんなの前で彼女を乱暴した。首謀者の大隊副業主任は、二十年の刑を判決された。しかし、結核のため保釈されて、現在、家で療養中である。

莫副書記は、彼の知っているかぎりのことを、私に説明し、しかも私の取材活動にできるかぎり協力することを約束してくれた。

殺害者十数人の男は、ただ警告処分だけだった

私は、莫副書記の説明を聞きながら、彼が賓陽県の李書記と似たような経歴の持ち主ではないかと直感した。やはり間違ひなかつたようだ。莫書記は微笑し、彼も九死に一生を得たなかの一人であるということを見せてくれた。彼はもともと「名簿」に載っていた人物だった。

彼は当時、小派の黒幕ではないかと疑われていた。しかし、大派の内部では、彼についての見方が分かれていた。八月十日早朝、彼が畑仕事をしている間に、民兵は労働改造農場の十数人を批判闘争大会へ連れて行った。結果的には、一人も生還しなかつた。このとき、畑には莫副書記一人だけが残った。彼は何かあつたかなと思つて、民兵に尋ねた。「私も行く必要があるかどうか」と。民兵はしばらく考えてから、「君はこの幹部である。一緒に行く必要はない」と答えた。「もし私も一緒に連れて行かれたら、それで終わりだった」莫副書記は、私にそういう話をした。

当時、県革命委员会主任は商星橋だった。この人物は、文革前には県委員会書記であり、「上林大虐殺」事件について、責任を負わなければならぬ。しかし、彼はいかなる処分も受けなかつた。そのうえ、文革後、南寧地区副主任に昇進し、現在はずでにその要職を離れたという。

人々は文化大革命問題を処理するとき、この人物を競つて上告した。しかし、結果的にはただ党内の警告処分を受けただけだった。上林県幹部も、群衆も、殺人者も、今日その件については非常に不服である。賓陽県のとくと同じように、私には、彼に返す言葉がなかつた。ただ、この商星橋の名前を黙ってノートに記録しただけだ。

「木山大虐殺」事件の犠牲者百六十七人

五月二十六日。私は木山へ行った。有名な「木山大虐殺」事件現場の匯水橋頭で車を止めて撮

影した。この「木山大虐殺」事件はきわめて残酷な事件である。一九六八年八月十六日、百六十七人が毆殺された。国家幹部職員六人、公社社員百三十七人、四類分子二十四人。同行者の話によると、現在のセメントの橋は、当時は木の橋であった。私は橋の下を歩きながら、この悲しい事件現場が映像のように一つ一つ浮かんできて、水の流れ、草むらを眺めながら、言葉を失っていた。

……一九六八年八月十六日早朝。大きな爆発音がした。まだ夜が明けていないのに、突然、人民公社放送が鳴り響き、熟睡している人々が起こされた。恐ろしいニュースが流れたのである。政権転覆事件が発生し、ひと握りの階級の敵が深夜、人民公社革命委員会を爆破したというのであった。同日、「ひと握りの階級の敵が政権転覆を企てたことを糾弾する」万人大会が緊急招集された。この呼びかけは、階級の敵に対してのプロレタリア大革命を断行する呼びかけである。

この日、匯水橋頭は、階級の敵を虐殺する現場というので、大群衆が集まり、紅旗がはためき、小派の幹部、および四類分子が数列に並んで、川原に向かってひざまずいていた。呉福田——文革後、死刑判決を受けたが、執行猶予となった——かれらの指揮下で虐殺が始まった。群衆は狂ったように襲いかかり、足で蹴り、棍棒と石で殴り続けた。

アツという間に血と肉が飛び散った。罪のない人々はつぎからつぎへと血の中に倒れた。さらに川の中へ突き落とされ、岸边や橋の上のほうに据えられた機関銃が水の中に落ちてもがいてい

る人々をいっせいに掃射した。藍秀飛は、最初の銃弾で死ななかった。それで大きな声で「毛主席万歳、共産党万歳」と叫んだ。そのほかの人々も死ぬ前に「毛主席万歳」と絶叫した。悲鳴、絶叫、喚声がかままで響いた。人間を殺すということは、決して容易ではないのだ。頑強に生きることを求める意思は水の中でもがきながら、流されていった。

四類分子の一部は、生き残ろうと群衆の口車に乗って川岸まではい上がり、同じ四類分子を殺して自分だけが難を逃れようとしたが、彼らは同じ四類分子を殺しながら、そのあとで殺害されたのである。一人もその現場から逃げ出すことはできなかった。

私はこの虐殺現場を見ながら、匯水橋頭を後にした。しかし、耳の奥ではまだ、「毛主席万歳」と叫ぶ声が聞こえるような気がした。

ある資料によると、この爆破事件は、たった一メートル前後の穴をつくっただけで、実際これを爆破したのは三人の主流派の指導者であった。彼らはこの事件をでっち上げ、それで百六十七人を殺害したのである。

〃人肉は煮るより、焼いたほうがおいしい……〃

私は新浦村のある大きな建物の中で、「木山大虐殺」事件の食人者の一人である謝錦文に会った。彼は当時、革命委员会主任で、その後、また大隊支部書記になった。この人の表情には、殺

気が残り、鋭い警戒の目でわれわれを見ていた。彼は、木製の椅子に座り、昔のことを語り始めながら、ときどき疑いの視線をそそぎ、その意図を推測していたようだ。

彼は、犯した罪について、それは重ねて歴史的な原因によるものであると語った。また、文革初期、上部組織からこういう「二十三種分子」に対しては、明確にプロレタリア独裁を断行しなければならぬ——という指示があったと述べた。これは彼の殺人の主な原因の一つとなっていたようだ。

しかし、私が、なぜ人間を食べたのか、と細かいことについて尋ねると、彼はやっと気持ちが悪くなったようで、彼は食人について、むしろ積極的に語り始めた。彼は、かつて中国共産党ゲリラに参加したことがある。一九四八年、あるスパイが国民党の警察を連れてきて人を捕えに来たので、彼らはそのスパイを殺し、腹を割いて、彼の肝を食ったという。歴史的には、井岡山せいこうざんの赤軍がかつて人の肝臓を食い、新しい戦士を勇気づけることがあったというが、謝錦文の発言からもその一端がうかがえる。彼が何気なく過去について語っている間に、私はカメラで彼の表情を撮った。裁判を受けていない殺人者は、あまり写真が好きではなかった。しかし、現在では彼には何の圧力もなかったため、完全に写真を断わるということはなかった。私は話している間に突如、彼に聞いた。

「過去に食った人間の肝は、かまどで焼いたほうがおいしいのですか、あるいは煮たほうがおいしいのですか」

「もちろん、焼いたほうがおいしいし、香ばしい。しかし、なまぐさいこともある」

私はこの食人者に対して、心理的にも、生理的にも、極端な嫌悪感を感じたが、しかし、幾分か感謝の気持ちもあつた。彼の話は、中国人を理解し、認識するときに、あまりにも示唆するところが多かった。

スパイの肝を食べることができれば、「二十三種分子」の肝も食べてもよい。国民党の人間の肝を食べてもよいなら、反対派と走資派の肝を食べてもよい。ゲリラが人の肝を食べてもよいなら、革命委員会、貧下中農、そして革命分子も同じように人の肝を食べてもよい。つまり、それは階級闘争であるからだ。つまりプロレタリア独裁の名のもとにおいて、そのことはできるのではないか。共産党の残虐事件の根源は、数十年来、すべて徹底的に普遍的な、一般的な価値を否定し、抽象的な人道主義、抽象的な愛さえ否定したところからはじまっているのである。

「木山大虐殺」事件——百五十余人は中学校校庭で殴殺された

一九六八年八月七日。木山中学運動場では、武闘犠牲者のための万人追悼大会が開かれた。同運動場は樹木に囲まれてはいるが、無実の人々が狂った暴力に倒れ、地面にはいたるところ、鮮血が流れしみ込んでいる。この日処刑された者は七十二人、殺人の嵐は、翌日も続き、二日間で

合計百五十余人が殴殺された。これがいわゆる「木山大虐殺」事件である。

私の目の前には、きれいな森林がある。もう十八年も過ぎ去った。鮮血と、血みどろな死体は、すでに鬱蒼とした森々におおい隠されたのであろう。私はそこでシャッターを切った。この現場は、何の問題も説明できなくても、何の証拠にならなくても、あるいは「木山大虐殺」の真相を証明できなくても、私はつきからつきへとカメラを構えて、すでに歴史となった現場写真を撮り続けた。この写真は、現在の人々に対して全く意味がないかもしれない。しかし、私は自分の感情を抑えることができなかったのだ。これは、無実の死者の訴えに対する私の深い同情と連帯であり、関心である。

私は、彼らのかわりに世界の人々に訴えなければならぬ。私がかりに監獄に入れられても、私はただこの言葉だけで、一本の筆だけで、歴史に向かってこの政権の暴力に対する訴えをしたのだ。彼らは、つまり中国共産党は、鉄のカーテンの内側で恐ろしいことを覆い隠すためには、あらゆる手段を使うに違いない。

昼食はあいにく、レバ炒め料理で、私は一生懸命、嘔吐感を抑えようとして、我慢して二切れを口の中に押し込んだが、そのあと料理を見ることができなかった。

ここ数日間、私は見たところ、聞いたところ、すべてが人間の肝をえぐり、人間の肝を煮て食べる、焼いて食べるという話ばかりだったので、心理的には、もうこれ以上、耐えられなくなっ

ていたのだ。

昼食後、私たちは木山中学へ行って、「木山大虐殺」事件被害者の一人の遺族に会った。この事件については、莫樹謀副書記が、かつて私に説明したことがある。取材ノートを開いてみた。喬賢公杜木山大隊の鄭建邦は古いゲリラ隊員の一人である。彼はかつて、右派分子と決めつけられ、死ぬときには、労働改造農場の監督の一人であった。彼は反共救国軍政治委員という名で断罪され、一カ月あまりの逃亡後、捕えられ、途中で殺害され、洞穴の中に投げ込まれた。彼の息子も、夫婦で殺害された。批判闘争大会の後、夜、糾察隊が来て、肝をえぐり取り、大隊で煮てから十数名がそれを分けて食べた。しかし、人の肝を食った二人の党員は処分されたが、群衆に対しては処分することはできない。ただ被害者の家族に対して謝り、あるいはわずかの慰謝料（だいたい百ぐらい）を払っただけだ。人の肝を食った二人の党員のうち一人とは、私が会ったばかりの謝錦文であった。

「木山大虐殺」事件遺族の衝撃報告

私は、ある古い小屋に入って、鄭建邦の遺族鄭啓平に会った。彼はおとなしく、小さな声でゆっくりと昔のことを語り始めた。幾分か不安の表情が見られ、謝錦文のような話しぶりとは全く違って、いったい、どっちのほうか食人者かわからなくなったぐらいだ。彼はこう語った。

……私の父が殺害された二日後、母もまた彼らに殴殺され、川に投げ込まれた。そして私の母は自殺した、と言われた。私の母を殺した理由というのは、私の母が毛沢東の写真でかかしをつくったからだ。実際は、たまたまかかしをつくるときに、古新聞紙の紙上に毛主席の写真があったからだ。私のおじも、「木山大虐殺」事件で惨殺された。同じ夜、兄貴も殺害されており、兄貴の肝は彼らに食われた。二番目の兄貴は歩けないので、餓死した。おばあちゃんはおばさんのところへ行った。私の父は早くから私を姉さんのところへあずけたが、そのことで、父は批判闘争にかけられた。彼らはあちこち私を探し、われわれ一家五人は、皆殺しにされるころだった。情勢はだんだん緊迫してきた。姉は恐れて、ひそかに私を親戚の家に預けた。そのとき、ちょうど「三里大虐殺」事件があった。町にはいたるところで、血のついた足跡が見られた。私が覚えてるのは、三里橋頭と川の中で死体と血が散乱し、遺族たちがあちこちで死体を確認しようとしている光景だ。やがて私は姉の家に帰り、たった六歳だったが、毎日、父と母のことを思い、家に帰りたいときりに姉にせがんだ。とても怖かったが、いったい何が起こったかということには全くわからなかった。父母と二人の兄とも殺害されたということも知らなかった。

やっと八三年になって、文革問題処理のときに、兄が彼らに肝を食われたことを知った。後年、私は学校に入り、周囲から馬鹿にされた。先生とクラスメートが文革を取り上げるたびに、私は頭を上げられなくなり、人々に顔向けができなかった。今日になっても、家の親族の死体は一つも見つかっていない。木山大虐殺の悲劇は、百余人の死体が四類分子にやたらに埋められたので、多くは見つからなかった。謝罪については、全くそんなことがあることも知らない。だが、私のところに来て謝ったり、謝罪したこともなかった――。

鄭は、小さな声で語りながらときたま涙を流し、悲しさをこらえた。ここ数日間、私はずっと自分の感情を抑えて、冷静に事実を記録し続けてきた。若い人の恐ろしい自制力は、私の涙をも誘った。鄭は、後に木山中学のある仕事を待たされた。彼はこのことを恩恵と思つて、政府と党の世話に感謝したようである。

鄭啓平はわれわれを見送るとき、私と黙って肩を並べながら、一緒に歩いてきた。私は、彼の肩を抱きかかえ、彼の生命力と彼の青春時代をその肩の筋肉から感じとって、おそらく彼の兄が虐殺されたときは、このくらいの年齢のころであろうと思つた。私は、歩きながら彼の歩んできた人生を思い、ついに涙を抑えることができなくなり、痛哭した。休め、静かに休め。安らかに眠ってくれ、私の十万人の広西同胞よ。私はかならずあなたたちのかわりに、全人類に真相を訴えるつもりである。

南寧地区の賓陽、上林両県の取材は、終わった。私が南寧市に戻ったとき、北明はすでに北海市からもどっており、それぞれの情報から分析してみると、武宣県こそは、こんどの広西取材の最重要地区であるに違いないという結論になった。私は北明と相談して、まず数県を回って経験

を積み重ねてから、最終的に武宣県に行くことを決めた。

「人間をやたら殺してよいものですか」

一九八六年五月二十八日、桂林。六月三日、鍾山県。整党事務所主任・整志強れいしきやうと会った。彼の話によると、鍾山県は文革の当時、殺人事件はそれほど多くなかった。わずか犠牲者六百二十五人だけだった。八三年以後の裁判では、二十八人が有罪判決となった。殺人事件は、高潮期が二回にわたった。第一回目は六七年十月、それは湖南道こなんどう県から地主、富農闘争の嵐が吹き荒れてきた。第二回目は西湾せいわんの戦いと言われ、大量の捕虜が殺された。西湾というところは、桂平磁務局の所在地である。

この地域は反主流派が優勢で、主流派がいくら攻めても攻め落とせなかった。六八年五月下旬から主流派武装部隊が、西湾を包囲した。断水し、電気を止め、兵糧攻めにし、十五日前後かかってやっと攻め落とした。主流派は捕虜収容所から報復のために、数多くの捕虜を集めて糾弾集会をやり、殺害した。

私は県党史事務所へ行って県史を調べると、ある歴史編集者が、私に自分が目撃した「鍾山大虐殺」事件の最初の殺人場面をこう語った。

……あの場面は、私が一生忘れられない光景だ。あれは、鍾山県の最初の殺人闘争事件である。突然、大きな横幕がかかげられ、「貧下中農最高法廷」と書かれていた。二人の人間が引きずり出されて、糾弾された。いったいどういうことが起こったのか、群衆がだんだん多くなってきた。ある人が出てきて、『毛沢東語録』を読んでから二人へ罪状宣告した。この二人は極秘会議を開き、共産党打倒を謀議した、という内容だった。やがて大きな声で「殺すべきかどうか」と群衆に尋ねた。群衆は、いったいどういうことが全く知らなくても、そろって大きな声で「殺せ」といっせいに叫んだ。二人はすぐ坂道のところまで連れて行かれた。しばらく後、二つの人間の首が街路樹に掲げられた。私はそばで見えていたある幹部に、びっくりしてこういうことを聞いた。「人間をやたらに殺してもよいのですか」彼は「これは大衆闘争ではないか」と叫んだ。彼も見ただかぎり、どうしようもないようだった。

名門・清華大学卒エンジニア夫妻への残忍な殺し方

一九六八年五月下旬。数県の主流派連合軍が反主流派の拠点、桂平磁務局を攻めた。勝利した側は、捕虜収容所の中から任意に三人を連れ出し、鍾山に連れて帰り、武闘犠牲者のために殉葬した。そのなかの周紹昌しゅうしやうしやうは、桂平磁精錬工場のエンジニアで、清華大学一九三七年の卒業生。自治区と鍾山県の何人かの同志の話によると、この人物は、国内外でも有名なエンジニアで、彼の妻・陸毅謙りくぎけんもまた、一九三七年の清華大学の卒業生で、同じく桂平精錬工場の化学実験のエン

ジニアである。しかも彼女は第三回全国人民代表大会代表でもあった。二人は磁務局が囲まれたとき、逃げ出すのが遅かったので、一緒に逮捕されて連れて行かれたのだった。

この事件記録によると、一九六八年六月六日午前、周紹昌夫婦など三人は、公安公社黃風大隊九連生産隊の道路脇穀物干し場まで連れてこられて、糾弾集会が行なわれた。やがて鶏公口の新墳まで連れて行かれて殺害された。私は彼らの虐殺現場跡を見たかったが、しかし、その場所は知らない、あるいはもう覚えていないといって、場所を教えてくれなかった。凄惨な殺人現場が、それほど早く忘れられるということはありえない。とうとう私は、ある村委員をつかまえて、そこへ連れて行ってもらった。

穀物干し場から一里ばかりのところに、鶏公口というところがある。私がいよいよ歩いてきた道というのは、十八年前、三人の被害者が歩いてきた道でもある。

この糾弾大会は、廖守鳳が群衆の前で周紹昌ら三人の罪状を宣告した。

「この二人は桂平磁精錬工場のエンジニアで、毎月給料は百三十五元、女のほうは国民党員で、国民党の区書記も担当したことがある。彼らは桂平『井匪』の頭目で、精錬工場の砦を設計した者だ。もう一人は西湾少数派の悪い頭目だ。民兵犠牲者は、彼ら三人によって殴り殺された。こういうような奴は殺してもよいか」と演説した。

周紹昌はそのとき、群衆に向かって話をしたいと要求したが無視された。周は、いったい何を

話したかったのか。彼はおそらく、彼らが武闘に参加していなかったことを釈明したかったにちがいない。工事設計もなかったことも釈明したかった。彼らは、土木建築技術者ではないし、妻は国民党との関係もなかった。彼が言いたかったのは、たぶん彼女が全国人民代表大会であり、法律上では、全国人民代表大会の常務委員会の許可なしには公安当局としては逮捕ができず、殺すこともできない、ということも言いたかったであろう。

しかし、周は、発言する機会を与えられなかった。全く真相を知らなかった群衆は、そのかしのもどで、そろって大きな声で「殺せ」と叫んだ。その後、拳銃が空に向かって二発発射された。殺人の合図である。その場で周紹昌、陸毅謙夫妻ら三人は大刀と鉞で切りつけられ、刺し殺された。きわめて残忍な殺人であった。

この事件は、まだ解明されていないところもある。話によると、銃声が響いた後、率先して、この三人を殴り、蹴り、刺し、殺したのは、何人かの若い女性であったという。どうしても不可解なのは、人は往々にして煽動されやすい。というのは、女性たちが殺人を奨励され、何人か殺すと、すぐアネと尊称されたからだ。

人食者・易晩生の生々しい告白

六月五日、県人民代表大会常任主任委員の楊旭松が来て、私とともに村へ行って、鄧記芳の殺害

事件を調べに行った。まず廻龍郷政府へ行つて、郷党委員会朱敏生書記を探した。彼は、かつてこの事件の発生した清塘郷党委員会副書記を務め、文革問題処理組組長も務めた。この事件は、彼みずから処理した問題で、私に非常に詳しく説明してくれた。しかも、陶文華、鍾永文を派遣して、われわれとともに当時の殺人者の易晩生に会いに行った。数里の道を歩かなければならないので、何人かがそこまで行く必要はないととめたが、私は詳しい事件内容を取材するために、行かなければならないと思つた。

私たち一行はある古い木橋の前で車を止めた。車から降りてから歩き、天気が暑いので、上着を脱いで二、三キロ歩いて、まだその村に着くことができない。数日前から、ずうっと日差しが強い日が続いているので、肩、背中、手は、水泡ができて痛かった。しかし私は、易晩生に会いたい一心で、村まで訪ねた。傾斜した土地で、思勤江の水が流れている砂地の川原である。殺人者たちは当時、ここで被害者を殺害した。区の党委員会李尚武書記——後に梧州地区司法処の副所長になった——。李書記は当時、ここを通つた。川原を見ると、人が群がって何かを押え殺している様子を見たが、牛殺しではないかと思つたという。後日になってわかつたのは、それは白昼堂々の人間殺害現場であつた。

私は四哨村に入ると、殺人者・易晩生の家へ直行した。多くの人々の説明で、事件の詳細についてはすでに理解していたけれども、被害者・鄧記芳という人物についてはこうである。――

……鄧記芳の父親は土地改革当時、四哨村の地主で、山上へ逃げて匪賊になつた。やがて二人の息子とともに銃殺された。一緒に山に登つた小さな息子、鄧記芳は、年が若いので労働改造二年を判決され、釈放されて村に帰つたが、母はすでに首つり自殺してゐた。彼は四哨村ではもう生活できなくなつていたので、隣り村の康平大隊貧下中農の鄧某に収容され、鄧某の養子になつた。鄧は、結婚後真面目に畑仕事をしてゐたが、突然、文革の嵐が襲つてきた。熱狂した四哨村には、階級闘争の対象としての殺すべき階級の敵がいなかつたので、みんな困つてゐるところに、急に昔の地主の遺児がまだ村にゐることを思い出した。党支部・黄炮賜書記は、武装民兵に命令して彼を逮捕した。同じころ、隣り村でも決して階級闘争のことを忘れてはいなかつたので、すでに鄧を捕えて、大隊事務所の一階に監禁してゐた。鄧は、二階の窓から四哨村の民兵が来たので、もう死から逃れられないと観念して、首つり自殺を図つた。民兵は、速やかに二階に上がつてきて、彼を縛つて村に連れ帰つた。途中、彼がいくら殴られても一歩も歩かないので、豚を運ぶために編んだ竹かごの中に入れて、かついで村まで連れて行つた。

村民たちは、彼を電信柱に縛り、殴り、蹴り、しかも赤く焼かれたこてを彼の顔、背中に押しつけたり、狂つたようにリンチにかけた。古い黨員、古い幹部、古い貧農が彼を殺害することを提案した。さらに、腹を割き、肝を切り取ることを提案する人物もいた。鄧が昏倒したので、彼をかついで川原まで来て、五、六人が松の枝を持って彼の手足を押え、易晩生が包丁で鄧記芳の

胸を切り裂いたのだった。

易晩生は、小さな体の細い年寄りで、古くて暗い農家で私と会った。私はついにこの有名な食人者に会った。私がこの薄暗い部屋に入ったところ、彼はちょうど二人の年寄りと一緒にトランプをして遊んでいた。もう悠々自適の様子だ。

私は開口一番、「なぜ人間を殺して肝まで食ったか」と聞いた。彼は「私は何でも認める。とにかく私はすでに八十六歳だ、もうこれ以上、長くはないので、牢屋に入れられることは怖くないよ」と答えた。

老人は、挑戦者のように私をながめた。私は、急にこの年寄りに濃厚な興味を抱いた。私は議論するのではなくて、彼とゆっくりと話をした。

彼はこういふふうに語った。

「なぜ彼を殺したのか。彼らは山中に逃亡して、匪賊になり、村に迷惑をかけたからだよ。当時、私は民兵で、毎晩歩哨をしながら、何十日も銃を肩にかけ、着るものがすべてポロポロになった。彼の父親にはいったいどういう罪悪があったか。それはある年の春、彼は食糧を貸してくれないので、そのかわりにほかの村の人たちに借りた。山に登って匪賊になって、また匪賊を連れて村を攻めた。解放軍が彼らを破り、村を救ったとき、銭海せんかいという兵士が犠牲になった。しかも村が石灰をつくるために貯めた何万斤という枯れ草を焼かれ、われわれは石灰をつくることができな

くなったので、彼を殺した。だれが来てだれが彼を殺したかと聞いても、それは私が殺したと答える。だれが聞いても同じ答えだ。私は何も怖くない。というのは、あれほどの群衆に支持されたからだ。殺したのは悪い人間だ。絶対怖くない」

「幽霊のたたりも恐ろしくない。革命をやるということについては、毛主席もこういう話をしたのではないか。われわれが彼らを殺さなければ、逆に、彼らはわれわれを殺す。彼らが死ぬか、私が生きるかというのが階級闘争である。私は手を下した。最初の包丁は切れないので捨てて、二つ目の包丁でやっと切り裂いた。心臓と肝臓を取り出したのは私がやったのではない（しかし事件の資料では、そういうふうに書いてある）」

易晩生は鄧記芳の腹を切り裂いた後、心臓、肝臓、胆嚢、腎臓を取り出そうとした。しかし、まだ、体内の血が熱いので、素手で、心臓、肝臓、腎臓、胆嚢などを取り出すことができなかった。そのとき易晩生は、鄧記芳の胸に向かって川水をぶっかけ、温度を下げてから手を伸ばし、腹から心臓、肝臓、胆嚢をえぐり出し、刀で細かく切った後、板の上に置いた。心臓、肝臓を取り出してから、手の指ほどに細かく切っている間に、群衆が競って奪い合ったという。

『鄧記芳割腹調査報告』（鍾山県公安局）によると、黄炮球こうほうきゅうは刀をもって半分に切りとって、そのまま家へ持って帰り、しかも一部を群衆にあげた。易晩生は、三つ指、二寸ぐらいの長さの肝臓を家に持って帰り、食べた。この勇敢なる老英雄は、すでに年齢が九十近くになったものの、

しかし豪気はそれほど減つてはいない。

空は急に暗くなり、夕立ちが降ってきた。陰湿な小屋を眺めながら、私はそれ以上どういふ問題もたずねられなくなった。また、どうしても彼らを憎む気持ちにはなれなかった。逆にここ数十年来、貧下中農は、何十年後の今日にいたつても、これほど貧しい生活をしているところを見ると、一種の同情の気持ちさえ生まれた。彼らが人間を残酷に殺害し、人間を食う状況を見出すと、じつに感慨無量である。彼らは階級闘争を堅持し、残酷に人間を殺害してその人肉まで食べた。

しかし、共産党は、彼らにいかなる幸福な生活を約束したのであるか。彼はむしろ哀れで、憎むべき人たちである。易晩生たちは、裁判を受けるのが当然である。だが、彼らもまた被害者の一人ではないだろうか――。

ではいったい、どこへ訴えればよいのだろうか。毛沢東主席か、中国共産党か、もちろん彼らは罪から逃れることはできない。彼らが元凶である。しかし、それ以外にも多くの罪人がいる。われわれの民族自身の暗い心理、階級闘争の敵を憎む熱狂が、われわれが互いに殺し合い、互いに食い合うことをもたらしたのではないか。そして最終的に、この民族を集団的自殺の地獄に陥れたのではないか。

私はたそがれの細雨のなかで、この老人の写真を二枚撮った。それは同情であるかどうか、みずから哀れむことであるか、私は知らない。しかしこの手記は、私およびわれわれ民族の自画像というべきものでもあろう。

反共救国団の反革命暴動というデッチ上げ

一九八六年六月九日、蒙山県。県整党事務所（しょうま）の肖主任と打ち合わせをした。肖主任は、文革問題処理工作組の二人に私を紹介して、詳しい状況を説明してくれた。この小さな県は、文革期間の殺人事件がかなり多く、全県の犠牲者は、八百五十余人だった。当時の全県人口は十三万人だから、千分の六・六、つまり〇・六六パーセント。そのうち、リンチで毆殺された人間が六百三人、迫害にあつて亡くなった人間が二百五十余人、皆殺しにされたのが百三十七世帯、大虐殺は六八年六月中旬の五日間に集中し、五百余人が殺害されたという。

この小さな蒙山県は、平和な陸の孤島だったが、六八年、旧正月前に文化大革命の嵐が吹きすさんだ。もともと蒙山の人々は、武闘を避ける伝統があつた。少なくとも、壁新聞、紅衛兵、大批判、大奪権闘争などなど、紅い革命の嵐で洗礼を受けたが、少なくとも大糾弾集会は、まだあらわれていなかった。

しかし、大虐殺の嵐は、階級闘争のなかでは避けるわけにはいかなかった。旧正月前の大晦日夜、中国人にとっては、一家団欒のときである。そのときに、反共救国反革命謀議が発覚したと

いう緊急情報が入ってきた。翌日は旧暦の元旦だが、金堀大隊は、断固とした処置をとり、階級の敵五十余人を逮捕、拘禁した。県武装部の万某政治委員は、たちまちみずから金堀に臨んで指揮をとった。全県幹部会議の席上で、金堀大隊の革命的行動を大いにたたえ、すぐ工作隊を送って、金堀大隊の階級闘争の先進的経験を総括するように勧めた。

もちろん県公安局は、決して気をゆるめず、すぐ調査隊を金堀大隊へ送った。調査結果では、反共救国団などという存在を確かめることができなかった。しかし、当時の雰囲気としては、このような結論を群衆に声明することはできず、しかも、万政治委員は、公安局の報告を全く無視し、続いて毛沢東思想宣伝隊を組織して、全県各地区に金堀大隊の経験を宣伝した。

彼らの種まきから、収穫までの期間は、きわめて早かった。三月二日、新連大隊は、一挙に「平民党」の存在をあげた。彼らの綱領というのは、貧農を殺して富農を保護するということである。一夜の間に周経通（地下黨員、右派、学校教師）ら三世帯十六人を殺した。三世帯の人々は、七十三歳の年寄りから、二歳の幼児までだった。翌日、この事件は県に報告があり、ちょうど全県退役軍人、民兵先進組代表幹事を招集中で、会議関係者は、新連大隊へ学習見学に赴いた。群衆への見せしめのためにも、走資派を捕えて、殺人現場まで連れて行き、見せしめにした。そのとき、大会は続いて、殺人者の新連民兵の責任者たちを表彰し、武装部は軍事科長・朱某を派遣して、階級闘争の新動向という壮拳を肯定し、しかも林彪が呼びかけた階級闘争の

「十二級台風を起こす」ことを呼びかけた。

四月十三日、蒙山県革命委員会が正式に成立した。

五月十五日、二つの公社の地主、富農、反革命分子、悪い分子、及び右派、走資派の街頭引き回しデモが集中して行なわれた。市場では三人を公開刺殺した。恐怖の紅い嵐は急速に、村々と広がっていったのである。

六月十二日、古排大隊大虐殺——三十名近くが殺害された。そのうち生き埋め八人。被害者のなかで比較的影響の大きいのは、元広西自治区委員書記、現在中央顧問委員会委員・陳漫遠のただ一人の甥陳顕林である。彼は、二十四歳、畑仕事をしているとき、呼ばれて家に帰り、縛られて連れ出され、すぐ生き埋めにされた。

県のなかでもっともひどかったのは、文平大隊である。この村は、県武装部からわずかしき離れていない。六月十日夜十時から翌朝八時まで、文平大隊は、四回にわたって五十二人をも殺害した。受難者の絶叫が県武装部まで届き、万政治委員がその声を聞かなかったはずはない。

もっともいやらしいのは、万は全県保安主任委員会を開催している席上、わざと三つの通知を出して、公開でやたらと殺人をしてはいけないと禁止した。それにもかかわらず、ひそかに意味深長なこういうような話をしていたそうだ。

「会議が終わってからは、もう人殺しができなくなる。当面こういうチャンスを失ってはならぬ

「い」
 万は賓陽県の王建勛と同じように、一方では殺人禁止を通達しながら、もう一方では会議でこういうふうにしやべったのである。

万政治委員は巧妙にも、殺人を禁止する会議を、実質的には殺人の動員大会を開いたことにしたのだ。

万政治委員の煽動と圧力のもとで、会議後、各地方では突如、殺人の嵐が吹きすさんだ。「十ニ級台風」が吹き乱れたわけだが、その輝かしい数字は、こうである。全県合わせて六十四個大隊、そのうち二個大隊を除いてすべての大隊が人間を殺していた。人民公社社員二百五十七人、町住民十九人、学生六十九人、元四類分子二百三十六人、四類分子の子女百十五人、政府機関幹部職工五十二人、その他九人。この数字については、文革の後、文革收拾委員会がさらに二十六人を追加訂正した。

殺人の嵐は、止めることができなくなり、七〇年の初めまで、殺人禁止通達が徹底しなかったという。最後の被害者は、一九七〇年一月に亡くなったようだ。

小学校教師は美人学生の心臓を狙って、殺害した

蒙山県の食人事件のなかでは美人の心臓を食べた事件がよく知られている。甘棠かんじょう大隊の小学

校教師・莫某は、美人の心臓が病気を治せるという話を信じて、人殺しの嵐の中で、十三、四歳の美人女学生をプロレタリア独裁の対象として、自ら進んで殺害すべきだと要求した。この女学生は殺害され、殺人者たちがその現場から離れた後、莫は一人だけその現場に残った。彼は夜中に、鋏で彼女の胸を裂き、心臓を取り出して家に持ち帰ったという。これは一九八二年につくられた事件の記録の一部である。

しかし、この年から、文革收拾委員会の運動は、それほど厳しくなく、この美人の心臓を食った事件は、全区に伝えられたが、民衆はきわめて不満で、そろってこの心臓を食った食人教師の死刑を要求していた。文革問題処理運動の工作員の話によると、莫にはすでに死刑判決が下され、処刑されたそうだが、これは広西全区十数名の死刑判決の一つである。

しかし、こういう話もある。一九八三年、莫は無実だと訴え、心臓を食べたことも否定した。私はこの事件資料を見たが、資料によると、この女学生が殺されたとき、一人の弟を背中に背負っていて、帯が胸のほうに交差していて、胸を切り裂くことは、きわめて難しかったとか、彼は民兵が去った後、一人では夜間、非常に恐ろしく、心臓を取らないで逃げ帰ったとかの弁明をしている。

私は、蒙山の友人に頼んで、一九八二年の事件資料を調べたが、結果は判明せず、さらに私みずから資料館へ行って資料を見たいと申請したが、許可が出なかった。一九八二年の資料はすべ

てなくなっていたのである。

その日の夜、私は文平大隊の兪志強支部書記と話をした。彼は、かつて秘密の日記のなかで、当時の事件について毎日、欠かさず記録していたので、文革問題処理委員会では、その日記が事件をくわしく知るといい材料になった。彼は、同情に基づいて一人の遺族と結婚した。私はこの善良にして勇敢な人に対して、彼を褒めたたえたが、しかし、彼は、自分は決して勇気があるのではないと言った。

彼の話によると、あの日記は後で証拠になるとは思わなかった。彼は、ただ、あまりにも手段が残虐なので、そのことに対する不平があっただけなのであった。

地主、富農はすべて階級の敵か。彼らは、非常に憐れむほどおとなしい。彼らは東へ行けと言えば、東に行き、西へ行けと言えば西へ行く。彼らは、毎月一人について二回、百斤に近い薪を出している。当時、彼は生産隊長に任じられ、会議で「名簿」が討議されたときもその場にいた。政治保安主任は、情報を洩らしてはいけないと重ねて注意した。

被害者の一人である丘明は地主、富農出身だが、人柄は非常におとなしく、しかも彼の近所に住んでいた。兪は隠しておくことができず、会議後、家に帰る途中、丘明がちょうど野菜畑で仕事をしていたので、ひそかに暗示する口ぶりで、「天気がよくないぞ、注意したほうがいいぞ」と話した。すると、彼は私が言っている意味を察知できず、「いや、天気はそれほど悪くない」

と答えた。彼は、立场上、はっきり言えなかったのも、やむを得ず、家に帰った。

殺人者はほとんどが民兵であった、政治保安主任は、支部書記に態度の表明を要求したが、支部書記は人殺しにあまり賛成しなかった。そのため、政治保安主任は街頭引き回しデモ闘争を要求し、支部書記はやっと同意した。じつは、民兵は早くからすでに闘争の用意を完了していた。ちょうど会議のとき、民兵隊長が現場から離れ、十分後、帰ってきた。殺害が始まった。その後、殺された人たちの家財道具を広場に持ってきて、地主の家財道具を分配するように、あらゆる家財道具をその場でセリに出し、市場のように家財道具を売った。そのお金は民兵たちが持っている、食ったり、飲んだりした。

食人犠牲者への補償は、肉、ニワトリ一羽、菓子折一箱

私は話の途中で、気がついたのだが、彼はある遺族の妻をめぐらした、と告白した。つまり丘明の妻である。私が、彼女の状況を聞くと、兪志強はしばらく黙ってから、またしゃべり始めた。民兵たちは、大人を殺した後、また子どもたちを殺しに来た。彼女は当時、一歳未満のいちばん幼い子を残してくれるように要求した。しかし民兵は許さなかった。家財道具はすべて持って行かれた。ただ、残してくれたのは、かまどとふとん一枚だけであった。

……事件記録はこう語っている。丘明、丘武を殴殺した後、また丘明の三人の子どもを殺しに

行った。丘の妻・呉建珍は、一人だけ私に残してくれと頼んだ。民兵たちは、あなたは怖がる必要はない、あなたには触れないから——こう言って子どもの首をひもで縛り、子どもをひもの両端を持って引きずって走り、防空壕へ投げ込んで、その後、岩石を下に落としたり。

当時、民兵が彼女を殺さなかったのは、彼女が貧農出身であったからだだった。彼女はあつという間に三人の子どもを殺されたので、この悲しい地方から離れるつもりだったが、行くところになかった。彼女は日中戦争当時、広東省から逃げてきた人で、小さいころから家もなく、だから行くところがないので、そのままこの土地に残ったのだった。

彼らは六九年、再婚し、現在二人の子どもがあり、大きいほうは十七歳、小さいほうは十五歳である。

しかし、昔のことがなかなか忘れられない。文革問題処理のとき、殺人者たちは、そろって彼女の家に来て謝罪したが、彼女はドアを固く閉めて会わなかった。彼女は後日、幹部の教育説得でやっと和解に同意した。殺人者たちは、肉一斤、ニワトリ一匹、菓子一斤を持ってきてひざまずいて謝罪した。彼女はこのようにして、過去をすべて水に流し、涙をのんで殺人者たちにお茶を出さなければならなかったのだ。

愈志强は訥々と訴えていた。私は初め、彼に多くのことについて聞きたかったが、ついに尋ねることができなくなった。それでもやっと「どういう記憶がもっとも深く残っているか」と彼に

尋ねた。

「それは恐怖だけです。民兵たちは子どもを殺すとき、一言も言わず、縄で首を締め、すぐ引張って行きました。子どもは死がすでに近づいているということも知らずに、真面目に『おじさん、からかうな、私の首が痛いよ』と叫んでいました。この民兵たちはつねに子どもらの家に遊びに来て、トランプをしたこともあったのです。あのような日々は、お前は死ねと言えば死ななければならなかったのです。事前にはほとんど何の前ぶれもありませんでした。人々はまさに恐怖のどん底にいました。ただ、子どもたちが世の中の險悪を知らなかっただけです」

ある晩、民兵たちが巡回の途中、つまらないので、姚某の家に雑談に行こうと思った。姚某がドアを開け、民兵が来たのを見てびっくりして、もう終わりだ、きょうは私の番だと、カチッとドアを閉め、部屋の中に入って、首つりをした。民兵たちは驚いて、屋内に押し入り、「私たちは殺しに来たのではなく、ただ通っただけだ、死んではならん、降りろ」と、叫んだが、姚は聞かずに椅子を蹴って、そのままぶら下がって死亡してしまった。そんな事件もあったのだ。この間、恐ろしい雰囲気農村地区を覆っていた。このように四類分子およびその子どもを皆殺しにすることは、広西省では各地で見られた。

ここまで書いてきて、私は思わず昔のクラスメートの作家・史鉄生から聞いた話を思い出した。一九六六年八月、北京駅の大ホール。そのとき、父母とともに「黒五類」の子どもたちが汽車

に乗る直前に、北京駅の最後の関門に集められ、待合室の中で数列にしてひざまずかせられた。一群の黄緑色の軍服を着て、腕に紅衛兵の紅い腕章をつけたグループが、熱いお湯を入れた水筒の栓を抜き、子どもたちの頭上からゆっくり熱湯をかけたグループが、熱いお湯を入れた水筒で反抗もせず逃げ出すこともできなかつた。ただ絶叫する声が聞こえただけで、傍観者は逃げ散って、駅一帯に悲鳴と絶叫が響きわたった。このような行為にどういふ言葉を使えばいいか。ただ、暴行と称するだけでは被害者の恐怖の心情をあらわすことができない。私は複雑な気持ちであつた。



反主流派の指導者・周石安の兄・周杰安

2章

「広西大虐殺」の現場報告

●なぜ、残酷行為が公然と展開されたのか

男性性器を食べた革命委員会エリート未婚女性

私は南寧地区と梧州地区を取材した後、もうそろそろ一挙に核心に迫るべきだと考え、全力投球で「武宣大惨劇」めがけて進撃することにした。

六月十日、柳州市に着いた。柳州地区では文革当時、六千人が殺害された。融安県では千余人、武宣県では五百余人。融安県での逮捕者は十九人、武宣県は三十人だった。全地区死刑者なし、死刑執行猶予なし。これが文革問題処理委員会の数字である。

武宣県では、食人事件が流行にさえた。街頭引き回しデモ闘争があるたびに、老婆たちはかごを下げて、糾弾大会の終わるのをじっと待っていた。人間が殺害されると死体に競って群がり、なるべくいい人肉を切り取って持つていく。遅れてきた者は人肉を切りとれないので、骨まで持つていく。人肉を食べた者は、幹部のなかでも少なくなかった。

例えば、造反から出世した武宣県革命委員会・王文留おうちりゅう副主任。彼女は最初、共産党の下部組織から、彼女がもっぱら男性性器を食べるといので、その報告書が党中央工作組に提出された。党中央は衝撃をうけ、八五年五月から六月にかけて数回にわたって、その実情について電話で聞き、なぜ彼女を党から追い出さないかと、詰問した。結果的に明らかにされた事実は、彼女はただ人肉、人間の肝を食べただけで、現在すでに党から除名処分を受け、一般労働者に格下げされたということだった。

もともと残虐な食人事件は、生きているままで腹を裂き、まだ息絶え絶えなのに肉一切れ一切れを削ぎ落とし、その人肉を油で揚げて食べるということだろう。柳州地方整党事務局・門啓均副主任は、またそういう状況を語ってくれた。

広西当局は文革問題処理期間中に、すべて人肉を食べた者は一律、党から除名処分すべきだと主張する文献を配ったことがある。食人事件に対して、特別懲罰条例をつくるべきだという意見もあった。しかし、この文献が万一、香港の人たちの手に渡り、広西食人事件が暴露するのを恐れて、文献がすべて回収されたのだった。しかし、文献に基づいて、問題を処理するように決められた。

だが、私は、だいたいここまで順調に取材してきて、各級の幹部もきわめて好意的な態度をとって助けてくれたが、柳州市地方委員会が初めて私に注意し始めたことに気がついた。

六月十二日午前、政治法律委員会事務所の藍主任との約束で、資料を閲覧に行く予定だったが、結果的には李責任者から呼び出され、李は私の紹介状を調べた後で、しばらくしてから、私に資料の閲覧を断わった。

私は、そのことが遅かれ早かれ来ることと思っていた。このような取材妨害と情報封鎖に対して、私はいっそう興奮して、逆に闘志満々になった。

もっとも柳州地方の作家については、だれの名前をも思い出せなかった。私はとりあえず柳州

市ペンクラブの紹介で、『柳絮』誌編集部を訪ねた。同編集長とあいさつして、雑誌についてざつぱらんに話したところ、この雑誌は最高発行部数が百五十万部に達したこともあり、毎号の純利益は二万余元など……と、編集長は商売話ばかりをしてくれた。私は相手を間違ったと思つたので、ここで別れた。

つぎに、柳州市文化局所属の『百花』『琴劍』編集部に出かけた。私のみずから名乗ると、編集部の人たちは、好意的にお茶を出してくれた。彼らも私の作品を読んだことがあるので、山西省の作家たちの事情にも詳しい。そこで私は来た目的を話し、なるべく武宣県のことについて話してくれるようお願いした。

私は、彼らから二人の人物の名前を聞き出した。その一人は王祖鑿、南寧師範学院国文科、前党支部書記、現在、退職している。王は元秘密黨員で、南方が解放されてから広西省に來た。彼はかつて来賓県委員会書記をつとめたが、後で右派分子と決めつけられ、労働改造へ下放された。文革期間中、彼はかつて自らの死を覚悟して「食人事件」情報を中国共産党中央に報告した。彼は「武宣大惨劇」事件を告発した功労者である。

もう一人は余光美、古いゲリラ隊員である。家は武宣県桐嶺の大地主。家から銃を盗んで革命に参加した。長い間、武宣県に暮らしているので、県の歴史に精通し、また武宣大惨劇を暴露した元勲でもある。この人は、被害者のために多くの訴状を書き、食人事件の状況にはきわめて詳

しい。現在は県史の編集者である。

私はこのくらい権力を恐れない勇敢な人物がいる以上、「武宣大惨劇」事件を暴露できないはずはないと考えた。

共産党当局の取材妨害工作

六月十三日午後五時、武宣に到着した。その夜、ある友人が余光美を連れて訪ねてきた。余は短い髪、短パンで裸足だった。しかし顔色はよく、さすが古いゲリラ隊員としての雰囲気があり、年齢より若く見えた。彼は過去の経歴によって、出世できなかった。数十年間、社会最下層の生活を見つめ、年齢が五十歳前後になってから初めて結婚した。

その晩、彼は文革当時の武宣県の重要事件と、武宣県内の指導者たちの複雑な内部状況を詳しく教えてくれた。彼はすでに私の噂を聞いていた。政府機関はあちこち電話連絡をしており、かなり緊張している様子だという。彼はひそかに資料を集めて私に提供する用意をしているかのようだった。それは彼らが食人者たちとの多年にわたる闘争で、今日、やっとその真相を暴露するときに来た、と考えていたかららしい。

文革当時、人間を殺害し、人間を食った黒幕たちは、まだ法律上の制裁を受けていないのだ。私は合法的な取材者の身分であっても、それでも地下活動をやらなければならないようだ。その

晩、私は日記の中でこう書いた。

「私は先駆者の足跡をたどって進んできた。もう責任は、私以外にはだれにも任せられない。私
が事情を知った以上、そのまま沈黙を守るということは、私が食人者との共謀を意味するような
ものだ」

翌朝、私は県整党事務所に行つて、劉副主任と打ち合わせた。彼は私の紹介状を持って中に入
つて、そのまま出てこなくなつた。私は事務所で新聞を読みながら待っていた。後でわかつたこ
とは、対策会議をやっていたから、なかなか出て来られなかつたのだ。

しばらくたつて、劉副主任がとうとう出てきた。私はもう一度取材目的を彼に確認し、資料を
調べたいと願つたが、彼は笑いながら、もう資料を調べることがやめてゆつくり話をしましよ
うという。やはり武宣県は友好的ではない。私が黙つて出ようとしたところ、劉副主任は私を送り
ながら、もう資料はどこかへ行つてしまった。時間がかかり過ぎていたので、探すのは難しい。
また、資料は詳しくない、やっぱり話だけのほうがいい、などと言つたりした。

私は別れるとき、彼に資料はどこに置いてあるか知っているはずだ、と告げたところ、劉副主
任はやはり資料は見えないほうがいいと言つて別れた。

なぜだ。彼らは何を恐れているのか。彼らはいつたい何を考えているのか。夕食のとき、宿泊
先の食堂入口で、余光美に会つた。今日の状態を彼に説明したところ、余はニコツとして、民間
の同志たちは、すでに早くから政府が警戒していることを知っていたという。さすが思ったとお
りだ。

「お前は今夜、亭主の生首を抱きしめて寝なさい」

私は初めて地元の人々のルートに頼ることになった。私は武宣師範学校前の武宣中学校まで行
つて、ある人物に会つた。彼の教えのもとで、当時の武宣中学生が人間を殺害して腹を裂き、肝
を取り、人肉を煮て食つた現場で写真数枚を撮つた。彼は重ねて私に絶対秘密を守るように頼ん
だ。それは相手たちがかならず報復に出るからだ。その夜、余光美が来て、すぐ私に昼間は武宣
師範学校とどこに行ったのかを尋ねた。まさか何者かに追跡されているのではないかと、私は急
に緊張してきた。なるほどそういうことだったのか。

ここにいたつて、私は方針を改めた。資料が見つからなければ、私は生きている人間の証言を
探せばよい——と。現在、文革問題処理工作の同志たちは、旧勢力に圧力を加えられていた。私
は県政法務委員会を訪ね、目的を説明して、取材をしたいと申し込んだ。私は取材の合法的な
手続きを獲得した。

杜天生・元公安局長は、もとの文革問題処理事務所主任だ。彼は公務執行のため、文革期間中
に過ちや罪を犯した人々と対立関係にあつたので、やがて職を失い、有名無実の公安局党組織書

記というポストに左遷された。彼には心臓病があったが、公安局は薬代さえ彼に請求させなかった。彼はつねに自分を慰め、敵が彼を死に追いやることをうすうす気づいていた。

この人物はかなりシャープで、私の要求に応じて、武宣県の文革の状況について全面的に説明してくれた。

彼の説明によると、全県は八カ所の人民公社、一カ所の鎮、百七カ所の大隊、六カ所の町があり、文革当時、九十余の大隊が人間を殺害した。人口二十二万七千八百八十六人のうち、文革中に殺害された人間は五百二十四人だったという。

武宣県は、文革が比較的遅く、約半年おくられていた。

……一九六七年一月三日、黄達県長が文革宣言した。たちまち、街頭引き回しデモが始まり、県檢察院の檢察長、食糧局長を批判し、そして多くの走資派への糾弾闘争がはじまった。しかし、人を殴ったり、人格まで侮辱する現象はまだ発生しなかった。

六月、広西自治区の最高権力者である韋国清支持派と反対派が鋭く対立し、激しい権力闘争が始まった。九月、工場生産が麻痺し、路線バス、定期便バスの運行も停止した。

一九六八年正月八日、主流派が反主流派の拠点攻撃を開始した。四月十五日、県革命委員会成立。かくてもっとも混乱し、もっとも血なまぐさい闘争が始まった。県革命委員会は、各派それぞれ二人の代表で結成されたが、指導部はほとんど主流派に握られた。反主流派はこれをセクト

主義の委員会であると激しく非難し、攻撃した。一方、主流派は反主流派を打倒しようとし、武宣文革史上、もっとも大規模な武装闘争が始まったのである。

五月四日、十二日、激しい武装闘争。県革命委員会が緊急会議を招集し、県革命委員会文龍俊主任（武装部長）が「いかに現実の状況を処理すればよいか。撃つてもよい、教育してもよい。どちらもすべて処理の方法である」と明言し、情勢はますます混乱した。

大派は総攻撃の命令を下し、その包囲網を縮めた。深夜には、爆発音がとどろき、あちこちに響きわたり、戦火が四方八方からあがった。小派はついに孤立無援のまま銃弾と食料がつき、総崩れとなり、なんとか包囲網を突破して逃走する人々が出始めたのである。しかし、主流派は黔江を渡るとき、川岸から狙撃し、生きている者は船を捨てて川に飛び込んで逃げ散った。大派は渡り場から巡視船を出して、探照灯で水面を照らしながら、逃走者を撃ち続けた。

——十三日朝、武装闘争が終わった。死亡者九十七人。捕虜三十四人が殺された。

小派の総指揮官・周偉安は、十三日早朝、包囲網を突破したが、十四日朝、禄新区大榕のところで逮捕された。大派の副総指揮・潘茂蘭は通報を聞きつけ、すぐかけつけ、周を殺害し、首と両足を持って、武闘犠牲者追悼大会会場へ来て、木の上に掲げた。武闘犠牲者たちの英霊を慰めたのだった。この首と足の祭典はきわめて残酷ではあるが、万人追悼大会のただの余興にすぎなかった。その直前には、すでに狂乱的な人々が二人の逃げた学生に生きたままの祭儀を行なっ

た。二人の学生は縛られ生きたまま、祿新中心学校の守衛、黄殿峨（くわんとんが）に腹を裂かれた。彼は右手で刀を持ち、左手で人間の心臓と肝臓をつかみ、取り出したのだった。彼はまた、人肉を切り取って、持ち帰り、豚肉と一緒に煮て、みんなに分けて食べたという。

小派総指揮者の周偉安の首と足は、小派全滅の象徴であり、武宣県大派の偉大な勝利の象徴でもある。だから、十分に利用しなければならなかった。万人追悼大会の翌日の夜には、大派の陳某は、わざと自転車で周の首と足を市内に運んで、周家に持って来て、首と足を周の妻めがけて投げつけ、しかもわざわざ彼女にこう聞いた。

「これは周偉安の首と足か」

「はい」

「それなら、お前は今晚、彼の首と足を抱きしめて寝なさい」

そのう、え次の日、また周の首と足を持って、市内のいちばん賑やかな市場で、見せしめのために群衆の前で掲げたのである。この日、武宣市内では数千人以上の人々がこの首を目撃した。周偉安の首と足一本は、市場の木の上に掲げられた。首はまだ目が開いていた。また、周偉安の妻は連れて来られ、それ以外にももう一人の女性も連れて来られて、二人ともその下でひざまずいていた。再び、彼女に質問が浴びせられた。

「これはお前の旦那か」

周の妻は頭を下げ、

「はい」と答えた。

「お前の旦那は悪い人ですか」

「はい」

「この足はお前の旦那か」

「はい」

それから二人の女性の衣着を脱がせようとしたが、群衆の前では、二人は頑として脱がないのである。ある人が刀で背後から衣服を切り裂き、こう言った。

「やせ過ぎて食えない」

女たちは、我慢して何も言わなかった。もう、顔も体も汗びっしょりであるが、反抗できなかった。周偉安の妻はすでに妊娠七、八カ月であった。

周家の悲劇はこれで終わったわけではない。つぎの犠牲者は周偉安の四番目の兄、周石安（しゅうせきあん）である。彼が批判され、糾弾闘争にかけられる理由は十分にあった。周石安は一九六〇年の大飢饉（しやうきん）当時、食糧一袋を盗んだので、七年の刑を受けていた。その後、労働改造農場から釈放されて、うちに帰り、それほど時間がたっていなかったのだ。彼は労働改造農場の釈放犯である。「二十三種分子」に属している。うえに、弟の周偉安が反主流派の指導者だった。

これが彼の批判され、糾弾された理由である。周石安は家で捕えられて、市内の十字街まで連れ出され、大きな声で「この野郎は周偉安の兄貴だ。彼は周偉安のために仇を討つつもりで……」と叫びながら、地面に押し倒され、ひざまずかせされた。群衆は集まってきて、彼を殴り、蹴り、半死状態にして、西門の波止場まで引きずって行った。

彼の腹を切り裂いたのは、王春栄である。心臓と肝臓を五寸の刀で刺し、腹を切り開いて、足で力いっぱい踏むと、心臓と肝臓がたちまち飛び出してきて、切り取って持って行かれた。続いて、人々はどつと襲い、あつと言う間に人肉がすっかり削ぎ取られたのである。屍骨はその後、小さな船で川の真ん中まで運ばれて捨てられた。周石安は、王春栄が手を下したとき、まだ息が絶えてはいなかった。腹を切り裂くとき、絶叫し、また、肝を切り取るとき、両手で肝を胸に抱きしめたので、下手人は驚愕したそうだ。

簡潔な資料とか、証言とかは一種の抽象的なもので、彼らの犯罪的事実を正確に伝えることはなかなかできない。また往々にして、当時の悲劇的な雰囲気および人々の感情を省略する場合が多い。私は検察官ではないので、これらの文字の行間から失われた、あるいは無情な歲月によって薄められた情熱と冷たい涙を拾うつもりである。

食われた人間への補償金は、二百二十元

私はアスファルトの道路を歩き、石畳の小道を上り、ある貧民街の小さな小屋で周兄弟の長兄周^{しゅうけつあん}杰安と会った。彼は全く無表情な顔と恐怖と懐疑の目で、私を見つめていた。私は身分証明書を出して、また紹介状を出して、私の目的を説明した。彼の懐疑の視線が一瞬、消えたものの、全く黙っていた。彼の表情からは、何も探し出せなかった。資料と証言の中から漏らしたあのような感情も見られなかった。兄弟の情けは、過去の苦痛な出来事は、あるいは一瞬にして出てきた涙と震える唇、そのような人間的な感情はすべてなくなっていた。

もし、私がある場でプロレタリア独裁を宣言すれば、彼はきっと何の弁解もなく、なんの弁解もなく、黙って私について来たに違いない。

彼は、二人の兄弟の死について無表情に淡々と、こう述べた。

……文革問題処理のときには、規定によって埋葬および補償金が一人あたり二百二十元、二人合わせて四百四十元もらえた。しかし、すでに二人の兄弟は食われ、二人の遺骨はいくら探しても見つからない。周偉安の三人の娘と、周石安の一人の息子と一人の娘は、すでに大きくなった。しかし、仕事の世話をしてくれたわけではなかった。二人とも国家の職員ではないので、当時、町で組織された労働隊に参加して、その日暮らしをしているだけだ。現在、われわれの生活は非常に貧しく、きわめて厳しい。

多くの人々はかつて彼らの人肉を食ったので、現在、逆にわれわれを憎んでいる。われわれは頭を上げることはできない。しかも、われわれのところに謝りに来た人はいなかった。そのかわり、われわれを恨んでいた。きょう、あなたが来ても、もし武宣の人が来たら、何も言えなかつただろう。家財道具はすべて打ち壊され、持っていかれたし、一九五二年当時、土地改革でわれわれにくれた家は六八年、農村に下放されたとき、家はまた政府に返した。今日にいたつても、まだ処理されていない。地主から分けられた住宅は、当時、住宅証書がなかったので、現在ではわれわれに分配していないことになっている。われわれの父親は労働者で、われわれは旧社会で十四、五歳から労働者になり、土地改革当時は貧民階層だった。

当然、二百二十元とはちょっと少ない。豚一匹を食うより、むしろ一人の間を食ったほうがましだ。ただし、もし一人の間が殺されて、二千二百元ももらつたら、国家の財政はたちまちに崩壊する。もちろん、人間の肉を食って、また人間を恨むというのは、道理にそぐわない。もし彼らの肉がわれわれに配られなかつたら、今日そんな汚名を背負うことはあるだろうか。

周杰安の感情はわれわれの憤怒を誘うことができなくなつた。しかも多くの寛容と理解を与えてくれた。私は彼の写真一枚を撮り、その後、急いで離れたのである。いくつかの小さな道をぐり抜けて、私は古い街道に戻ると、やっとホツとした。

この小さな道はそれほど広くはない。二台の車がすれ違いもできない小路である。交差点は西関交差点で、あの周杰安が連れられて、ここでリンチを受けたところである。私は、周が石畳の小路から波止場まで引きずられた道を歩いていった。西街はそれほど長くはない。西街の終点には、もう少し広い石畳があつて、その石畳を進むと黔江の川辺におりていくことができる。数十隻の船が川辺に止まっている。証言と資料の中で言われている西門の波止場であろう。私は長い石畳を歩きながら、もう一つ思い出した。周杰安が引きずられて、石段を下っていくときの状況を思い出しながら、そのとき、ひよっとしたら、頭が石畳をゴツン、ゴツンと、血だらけになつて下まで引きずっていかれたのではないかと想像していた。

黔江は高い台地から下を眺めると、暗緑色で、川の対岸は青い緑色におおわれた世界である。その絵のような川の流れの景色の真ん中に、小さな島があつた。急に食人事件の資料と証言を思い出した。あそこは人間を糾弾し、殺害したところではないか。武闘の総指揮・周偉安が深夜、包囲を突破して、この道を下ってきた。ずっとこの道を下ってきたに違いない。彼らは戦いながら、この長い石畳をおりてきた。川辺に逃げてきた彼らは川を渡れば、すぐ脱出することができると思つていたに違いない。

しかし、対岸にはすでに狙撃者たちが待っていることなど、考えられもしなかつた。機銃掃射と探照灯が水面を照らしながら、血の泡が噴いた。翌朝、人々はこの小さな島の岩の割れ目の洞穴から四十名近くの中学生紅衛兵を探し出した。そのうち十五歳の学生一人が保釈されて連れて

いかれた以外は、全部、その場で虐殺された。

私は想像していた。なぜ、兄弟二人ともこの道をたどって死に向かったのか。運搬工であり、クーリーであり、社会の最下層の労働者兄弟の二人は、この川辺の石畳の上で重い荷物を背負い、多くの汗水を流した。あの恥ずべき大飢饉のとき、兄が国家から一袋の食糧を盗んで、生きる権利を主張し、権力に反抗を示した。数年後、成長した弟が現存の秩序に対する不満から、青少年によってリーダーに推された。それは社会の不公平に対する抗議に違いない。そのため、彼は死にいたってしまったのであろう。

私は、彼らの歩いてきた道に沿って、川辺まで来て、当時の状況を思い出し、ゆっくり歩きながら考えていた。私はやるせなくなつた。一人の人間が食糧一袋を盗んだだけで七年の刑を受けた。その後、またその罪名により腹を切り裂かれ、憎まれ、食べられた。しかし、あの殺人者たちは数人を殺し、しかも逆恨みをして、人肉を酒のさかなにしたにもかかわらず、狂った虐殺者・王春栄はたつた十三年の刑しか受けていないのだ。

中学校校庭で開催された《人肉宴会》の異常さ

私は武闘、あるいは武闘の余波と食人事件とは、ほとんど関係がないことを発見した。しかも、数例の食人事件の発生は、大武闘の前にすでに行なわれた。例えば、一九六八年五月四日、通挽

区古佐大隊が覃允琢らを糾弾闘争した後、散弾銃で彼らを撃ち殺し、人肉を切り取って分けて食べた事件がある。また、例えば、一九六八年五月十四日にも韋昌孟ら十一名の人肉を食べた事件もある。彼らは、まず刀で殺害し、続いて腹を切り裂いて、肝臓を取り出し、村に持って帰って、二十数名を招いて《人肉宴会》を開催したのである。

この二つの事件は、大武闘事件以前に起こつた。しかも、武闘とは無関係である。私は武宣の食人惨劇の発生は、その原因が政府、軍当局からのそそのかしであり、「十二級台風を起こす」階級闘争の精神が推し進めたのだと思う。

武宣県では一九六八年三月十九日、初めてリンチ殺人があつた。この事件は処罰を受けなかつたので、一つの前例となり、逆に残酷事件を奨励する前例となつた。その後、殺人事件は流行のようになつたのである。五月末から六月初め、柳州軍分区は「台風を起こす会議」を招集した。そのとき武宣県革命委员会主任、文龍俊（武装部長）、と三里区革命委员会主任、潘振快が出席した。

六月十四日、武宣県革命委員会が、県、区、大隊、生産隊の四級幹部会議を開き、軍分区の「台風を起こす会議」の精神を貫徹するよう伝達した。文龍俊はその会場で、敵との闘争に対しては「十二級台風」を起こさなければならぬ。その方法としては、十分に群衆を動員して、つまりプロレタリア独裁により、その政策を労働者の手に渡し、階級闘争については手を緩めたり、

同情心を持つてはならないと呼びかけた。そこで、大武装闘争の後、一カ月ぐらい静かだった武宣県は、急にあちらこちらで凄惨な殺人事件、あちらこちらでの《人肉宴会》という人間地獄が出現したのである。

あの周石安を殺した下手人は、志願兵の復員軍人だった。王春榮はすでに仕事をやめて一カ月たっていた。県革命委員会が「台風を起こす会議」の期間中、彼はまた五寸の刀を取り出して、武宣県の労働者階級独裁のために、特殊な貢献をした。武宣区で招集された批判闘争会の席上で、譚啓欧だんけいおうを生きているまま、殴殺したのだ。また黄振基こうしんきは殴られて卒倒した。彼は街頭引き回しデモの中で、意識をとりもどし、王春榮に向かって命乞いをした。「同志よ、私を許してくれないか」王春榮は五寸の刀を振るいながら、「五分間だけ許そう」と言った。彼を前まで引きずってきて、中山亭に着いたとき、王は黄を引き倒し、足で胸を踏み、手に持っていた刀で、生きていた人間の腹を切り裂き、心臓と肝臓をえぐり取って、生命を奪ったのだった。

つぎも王春榮についてである。六月十七日。彼はこの日のデモ中、新華書店の前で、まだ生きている製米所の臨時工を殺害した。王春榮は手持ちの刀で腹を裂き、心臓と肝臓を取り出した。まわりでとり囲んで見ている群衆も競って人肉を切りとった。臨時工はその場で絶命したことは言うまでもない。その後、王春榮は得意満面で人間の心臓と肝臓を下げ、食品会社の豚肉販売部に行つて、人肉と豚肉を調理して、一緒に酒のさかなにしたのである。

当時、階級の敵が受難しているときは、人民革命の勝利を喜ぶときだったのである。これは一つの革命の祭日である。県裁判所の毛景山もうけいざん裁判所長は群衆のなかで隣りにいる軍の將校に対して、「このようにみだりに人殺しをやるのは何とということか。あなたはなぜ止められないか」と述べたことがある。この軍官は県革命委員会の副主任、嚴玉林げんりよくりん（県武装部副部長）である。この権力を手にした軍の將校は、「群衆のことは私の手の届かないところだ」と答えた。もちろん彼は人を殺し、人肉を食う群衆を阻止することはしなかった。彼はちやうど「台風を起こす会議」を招集して、主席台からおりて、現場の観衆席に来て、現状を見ながら傲然と得意げにしているにすぎなかったからだ。

このように一人の偉大な指導者の指導のもとで、一人の現役軍人の執行、及びもう一人の退役軍人の熱烈な演出のもとで、武宣県という土地は人類文明史上、かつてなかった血なまぐさい、醜い大惨劇が幕を開けたのである。こうして食人の嵐がうずを巻き、集会があるごとに闘争があり、闘争があるごとに死者が出て、死者が出れば、かならず食われ、惨劇がくりひろげられたのだ。人の度肝を抜くようなりんち、処刑はますます表面化して公然と行なわれ、《人肉宴会》がくりひろげられ、寛容と仁慈の心が消えてなくなったのである。

六月十八日。少なくとも三つの地方で《人肉宴会》が行なわれた。三里区台村大隊の糾弾闘争集会には、陳漢寧ちんかんねいらが出席した。会場では、全大隊の人々が集まり、そのまわりには武装民兵が

遠巻きに囲んで、殺気がみなぎっていた。文革主任、陳思庭はその会議を主催し、糾弾される人々の罪状を読み上げ、続いて、群衆が約三十分前後、糾弾をくりかえした。その後、陳が群衆に向かつて「こいつらは、どうすればよいか」と質問した。群衆はそろって「殺せ」と絶叫した。陳は刀で三人を切り殺し、しかも腹を裂き、肝を取り出し、村人とともに煮て食べた。

この事件について、県の整党委員会の事件関係資料によると、陳は最初、腹を裂き、肝を取り出すことができなかった。どういうふうに手を下せばよいか知らなかったのだが、そのとき、一人の年寄りが彼に人肉と肝を切り取る要領を教えたという。腹部に向かつて「人」の字の形で切り、足で力強く下腹部を踏めば、心臓と肝臓がすぐとび出て来るということを教えたのだ。つまり、これは、腹を裂き、心臓をえぐり取る技術がすでに存在していたことがわかる。陳はその後、十四年の刑の判決を受けた。王春榮より刑期が一年多いということで、武宣県の中では刑期がいちばん長かった人物だ。

同じ日に、黄茆人民公社が街頭引き回しデモ闘争を行なった。小学校教師の張伯勛が連れて来られて、つるし上げ糾弾集会が行なわれた。張はもう逃れられないと観念して死にも狂いで逃げ出した。逃げ道がないので川の中に飛び込んだところ、民兵が水中から彼を川岸まで引きずって来て、刀で腹を裂き、心臓と肝を取り出して持ち帰り、缶詰の空缶で煮て食ったという。そのとき、張は皮膚、人肉、及びはらわたまで、すっかり切り取られてなくなってしまったのだ。

うだ。

もういたるところで《人肉宴会》が開かれ、黄茆人民公社の食品部および販売部は、もつとも《人肉宴会》が賑やかで直径一尺八寸の大鍋で人肉を煮て、十数人が宴会を楽しんだという。

杜天生の談話記録では、こういうことを言っている。黄茆人民公社は一日七人を街頭引き回しデモ闘争にかけ、六人を殴殺した。

同日、武宣中学でもまた《人肉宴会》が開かれた。政府関係資料には、以下のような簡単な記録しか残っていない。「……一九六八年六月十八日、武宣中学の吳樹芳は、批判糾弾集会で殴殺された後、肝は薬用にされた」

学校というものは人間を育て、人間を教育する場所で、このような残虐きわまりない、人間性を失った行為が行なわれたことは、じつに理解に苦しむことだ。幸いにして、私が武宣県に来る前に、すでにこのような事件の詳細を知っていた。さもなければ、あのような恐ろしい、醜悪なる事件が、たったこのくらの記述だけで、薄められることはありえない。

柳州の整党事務所の門啓均主任から提供された資料にしたがって、私は地区教育局を訪ねて、吳宏泰・指導員と会った。彼はこの地区の文革処理工作組組長。かつての武宣中学校長を務めたことがある。彼は、武宣文革に対して発言権を持っていた。吳宏泰は非常に親切に私に説明した。彼は湖北省の人で、中原大学（現在の華中師範大学）教育学部第一期卒業生である。一九五〇

年、広西に来て、共産党の第一回幹部教育を受けていて、横顔から見ると、文革四人組の張春橋（ちょうしんこう）に非常に似ていた。きわめて人なつっこく、正直な人物という印象で、彼は典型的な学校教師であろう。

食った人肉は地主の肉で、特務の肉である

彼は、私に詳しくある武宣県の衝撃的な食人事件を説明してくれた。第一日目は、主に武宣中学食人事件の話をした。彼自身、目撃者の一人で、やがて糾弾され、肅清された一人でもある。彼の頭の中には、すべてが生き生きと記憶されており、糾弾大会と食人事件の現場について、じつにリアルに証言した。

武宣中学校は名門校である。一九六〇年、全柳州地区から選抜されて北京に行つて、文革会議に参加した二つの学校のうちの一つでもある。彼は学校校長だから、もちろん走資派でもある。みずからの目で当時の多くの残酷事件を目撃し、彼はそのため生きる気を失つた。彼はひそかに学校から姿を消し、川岸まで行つて小さな中州で靴を脱ぎ、きちんと置いてから川の流れに飛び込んで投身自殺をはかった。このとき、一人の羊飼いの老人が彼の投身自殺行為を目撃した。

この年寄りには彼が何を企てているのかということがわかつていた。この老人は「嵐はもうそろそろ過ぎ去っていくぞ。もうそろそろ過ぎ去っていくのだから……」と叫んだ。

校長はこの一言だけが耳に残り、思いとどまり、この罪惡に満ちあふれる世界に戻ってきたのだ。しかし、それからの災難は、決してそんなに早く過ぎ去つたわけではなかった。

一九六八年六月十八日夜、語文教育研究組組長および地理、図画の先生である呉樹芳は毆殺された。当時、それはどうということではなかった。全校の教師、そのなかで貧農出身の教師五人以外には全部、糾弾闘争が展開された。さらに不可解なのは、ある武装学生グループが呉宏泰および黒いグループと言われた教員三人組——文革後、校長になった韋天社（いんてんしゃ）、数学教育研究組組長の覃馳能（たんちのう）、男子教員、何凱生（かがいせい）の三人に、呉樹芳の死体をかつかせて、数キロ離れた近郊の川岸まで行つたのだ。

銃を構えた数人の学生がその一行を後ろから監視し、大部分の学生はその後ろからついてきた。高校二年生の傅兼堃（ふけんきん）は、一本の包丁を死体の側に投げ捨てて命令した。

「特務！彼の肉を切れ。今晚のさかなにするから。しかし、彼のはらわたを破いてはならんぞ。もし破いたら、お前たちは、川の中に彼と一緒に投げ込まれるぞ。ただ、心臓と肝臓だけでいいんだ」

呉宏泰校長ら四人グループは、地面にひざまずき、ある人がその包丁を呉校長に渡した。彼は包丁を拾い上げた途端、手が震えて、何もすることもできなくなった。ある人の記憶によると、

呉校長は包丁を拾い上げたところ、昏倒して気を失ったという。

学生たちはのしりながら、この包丁を覃馳能に手渡した。彼は歯を食いしばって、もし自分がやらなければ、自分も学生たちにやられるからと、懐中電灯の光の中で、呉の心臓と肝臓をえぐり出し、また血したたる大腿部の人肉を切り落として、ビニール袋の中に入れたという。

その後、調べたところによると、学生たちは人肉を三カ所で焼いて食べたらしい。その一カ所は学校食堂の炊事場で、炊事係のおばさんに頼んでドアを開けてもらって、約七、八十人の学生がそこで人肉を食べた。もう一カ所は革命委員会、黄園楼副主任の宿舍で、空缶を使って煮て食べた。黄副主任は食べなかったが、しかし四人の学生がそれを食べた。もう一カ所は、三十一組と三十二組の教室の外の廊下で、人肉を料理して食べたという。人肉が切られた後、呉樹芳の遺骨は、川の中に投げ込まれた。

武宣中学文革委副主任は文革収拾期に、人肉を食ったため、党から除名処分された。しかし、彼は自分の過ちを認めず、こう主張した。

「食った人肉は地主の肉で、特務の肉である」

当時、彼はまた支部にも人肉をいっぱい渡した。しかし、彼は現在もそれを認めようとしない。当時、人肉を食ったということは階級の敵を打倒したということの一種の誇りであり、光栄なことであったからだ。

《人肉宴会》——これが「十二級台風を起こす階級闘争」だ

私は武宣県の先生が食われた学校へ出かけた。人間が人間を食うことはすでにおかしな話である。学生が教師を食ったことは、なおさら前代未聞であろう。私は陰湿な炊事場で数枚の写真を撮った。炊事場の大きな釜も写真撮影した。また、三十一組、三十二組の教室外の廊下でも写真数枚を撮り、学校構内の木が生い茂ったもう一カ所も写真撮影した。

ある日の深夜、学校の炊事場の煙突から煙が上がり、学校の構内で、教室の外で、あちこち学生が集まり、ファイヤーが彼らの若い顔を照らしたとすれば、それは祝日の晩餐会ではないか。彼らは大きな鍋、小さな鍋に人肉を入れ、焼いたのだ。彼らが教師の人肉を料理している状況を想像しただけで、なんたる教師の尊厳、なんたる教育、道徳文明とは何か——ということになる。これこそ「十二級台風を起こす」階級闘争なのである。この台風が、すべての道徳を吹き飛ばしたのである。

「子どもを救え」とは偉大な思想家、魯迅が今世紀の初めごろ、中国人自身に呼びかけた言葉だ。彼は『狂人日記』で、四千年の食人史を持った中国では、大人は人間を食らったが、しかし子どもはまだ人間を食っていないかもしれない、と書いている。この小説は象徴主義的な小説である。しかし、不幸にして、この偉大なる社会主義社会では、子どもの食人まで実現したのである。子

どもたちは、この人類のもっとも輝かしい社会主義の理想の感化、薰陶のもとで、人食いを始めたのである。

子どもは民族の希望と未来である。しかし、その子どもたちがそのかされて、人食いまでしてしまつては、この民族には、もはや希望と未来はない。もちろん教師を食つてもよいなら、学生が食われるのも当然、当たり前のことだということにならう。

〃絶命するまで待つてくれ、性器は死んでから切ればいい〃

私は、ここでもう一度、声明しなければならぬ。本書で取り上げている惨劇は、決して武宣県で起こつたすべての事件、あるいは大部分の事件ではなく、比較的有名な、ごく少数の事件にすぎないのだ。

惨劇がこれほど集中して起こつたということは、「台風を起こす会議」の後、十日間、武宣県の食人は、人々が一種の恐怖と発狂状態に陥つて発生したということだろう。

しかし、人の血は水ではない。いかに正当なる理由があろうと、人間を食ふことの正当な理論的支えにはならない。いや人間を殺して、人間を食つた行為というものには、それ以上に心理的な代償を払わなければならない。ついに、彼らはだんだんと残虐行為を続けられなくなつてきて、彼ら自身が、彼らの理論を支えられなくなつてきた。

六月二十六日、県革命委員会が階級闘争の新しい情勢の展望を研究、分析する会議を開いた。各地区革命委員会の主任、区武装部の部長は、殺人の進め具合を報告した後、つぎからつぎへとエスカレートした階級闘争——これ以上の街頭引き回しデモ、つまり糾弾闘争はやめたいと要求した。この階級闘争の後退するような雰囲気なかで、県武装部の政治委員、県革命委員会の孫瑞章^{ずいしょう}第一副主任は非常に不満で、こう反論した。

「恐れることはないのだ。諸君は何を恐れているのか、さっぱりわからない。こうしなければ、絶対に、階級の敵を抑えることはできない。人民の闘争意欲を育てることはできない。決して、われわれは恐れてはならない。続けて街頭引き回しデモ闘争をやり、糾弾大会をやるべきだ」

この会議が終わつてから、武宣県の惨劇はまさに高潮期に入ったのである。

これは生きているままで、人肉を削ぎ取られ、食べられた典型的な食人事件である。一九六八年七月某日。通挽区大園村。第七生産隊の甘克星^{かんくせい}が糾弾大会を指揮し、甘大作^{かんたいさく}の糾弾大会を開いた。その後、甘大作は近くの畑まで引きずつていかれ、ひざまずくように命令された。そのあと、甘大作は棍棒で頭を殴られ、昏倒したが、まだ絶命していなかった。このとき甘祖揚^{かんそよう}が甘大作のズボン^{ズボン}を脱がせ、生殖器を切ろうとしたところ、甘大作は、息絶え絶えでもがきながら彼に哀訴した。

「私が絶命するのを待つてくれ、死んでから切り取ればいい」

しかし、甘祖揚は全く聞かずに、性器を切断しようとした。

甘大作はわめき、もがき、絶叫したが、甘維形かんいけいらは競って大腿部の肉を削ぎ落とし、甘徳柳かんとくりやうは腹を切り裂いて肝を取った。またその他の人々はどつと歓声をあげて、甘大作に殺到し、人肉をすっかり削ぎ落として持って行った。この生きたままの人間の肉に襲いかかった状況は、きわめて残酷であつて、見てはいられない残虐さである。

この事件には、もう一つ余談もあつた。甘祖揚が手を下すまえに、「七寸（生殖器のこと）はおれのものだ。だれも切り取ってはならん」と大きな声でわめいたのだ。競って人肉を切り取っているとき、この叫びはまことに恐ろしく、また生々しい状況の一つである。甘祖揚という人物は生産隊幹部でその後、七年の刑を判決されたという。

典型的な《人肉宴会》とは、どんな様子か

もう一つは、《人肉宴会》の典型的な例である。一九六八年四月十日。三里区上江郷門前で糾弾大会が開かれた。この糾弾闘争では、四人が棍棒で殴殺され、四人の死体が肉を切り取られ、二つの大きな鍋で煮て、約二、三十人がその《人肉宴会》に参加したのだ。衆人環視のもと、人肉を煮て食べるという集団食事件が、地方政府所在地で開催されたということは、きわめて衝撃的な影響を与えた。

この日、群衆が競って人肉を切り取り、熱気むんむんの殺人現場で、一人の髪の毛が真っ白の老婆が興奮して群衆の間に割り込み、ひと切れの肝を切り取って、かごに入れて、得意揚々、満足そうに家を持って帰った。その日はちょうど霧雨が降り、雨水が肝の血とともに地面にしみ込んでいた。またこの糾弾大会のエピソードとして、もう一つの逃亡事件もあつた。

三里中学教師の陳金吾ちんきんごは、右派分子として学校のある空部屋に監禁され、次の日の三里の市の日、引き回してから殺して食べられる予定だった。そのとき、運よく、中学の、同じ右派分子の炊事係・楊光槐ようこうかいの妻にひそかに縄を解かれ逃げ出したのだ。しかし、陳金吾は慌てふためいて逃亡したものの、髪の毛が鮮明な十字に剃られたままなのでどこへも逃げる事ができない。実際、彼は逃げ道がなくなっていた。ちょうど、彼は武宣中学から出て来たところを、武宣農場の民兵に捕えられた。

農場の謝開年しゃかいねん武装部長は朝鮮戦争に参加した軍人で、湖南省の人であつた。陳は謝開年から尋問を受けている間、彼のなまりが湖南人に似ていることに気づいた。そこで陳はひざまずいて「自分も湖南人である。救ってくれ」と哀訴した。謝は彼に同情して、一計を案じた。陳は空からめぐり込んだ特務工作員であると偽って告白して、県武装部の監獄の中に入れられたのだ。

この特務工作員事件が偽りであるとはっきりしたころ、人食い風潮も過ぎ去った。陳金吾は幸いにして生き残つたのである。陳は謝開年によって監獄に入れられたわけだが、おそらくこのこ

とを終生、忘れられないだろう。

読者諸君は、おそらくまだあの男性性器を食べることによって、共産党中央から怒られた革命委員会・王文留副主任のことを忘れてはいないであろう。私は政府関係資料の中で、つぎのような簡単な資料を見つけた。

一九六八年七月十日、殺人と食人の嵐の中で、東郷区とうきょうくの中で三人の小派の人間が駕馬山かまさんに逃げ山狩りを行なった。逃亡者のうち、一人は逃亡し、一人は洞穴に落ちて死亡し、一人は撃たれて死亡した。そのとき、この人物は刀で心臓と肝臓をえぐり取られ、竹網に入れられ、背負われ、区役所に帰ってきて、その晩、糾察隊員によって区役所の炊事場で煮て食べられたのだった。

このとき、女子民兵・王文留は、ふた切れの人肉を家に持って帰り、彼女の母に食べさせた。王文留は人肉を食べたことによって、共産党から認められ、だんだんと地位が上がり、最終的には武宣県革命委員会の副主任になったわけである。

近来の中国の進歩的文化人が官吏、つまり役人の出世を非難する場合は、つねに「血塗られた冠」という言葉を使ってきた。しかし、それは王文留、および武宣県の幹部たちに対してはふさわしくない用語であろう。彼らは人殺しから出世しただけではなくて、人間を食って出世したからである。

県の整党委員らが、王文留のために弁明した話によると、当時、県内に確かに性器を食う風潮があったのだそうだ。しかし、彼女は当時、わずか十八歳で、まだ結婚していない娘である。もっぱら男性性器を嗜食することは、いくら考えても不可解なことだ。ただ、彼女はかつて人肉を食べた。もうすでに党から除名処分されて、すでに幹部ではなくなり、現在は柳城りゅうじょう県のあるダムで一般労働者になっている。

私は断わられて、見せてくれなかったが、武宣県政府側のほうが正しいか、あるいは全自治区内で伝えられている噂のほうが正しいか。もし感情の上から言えば、私はどうしても政府側の説明を信じるわけにはいかない。彼らがそんなことは不可能であろうと推理するのは明らかに説得力は薄い。まして、このような人を食う伝聞をいちいち調べてみると、確かな真相がやっと明らかになってきたというのが事実である。

ご承知のように、昔の伝説は当時の生活を反映するもので、それは一種の象徴と誇張である。その事実は現代の伝説、噂もまたそうである。とくに、現代の独裁国家では、民衆はただ噂という形でしか、社会の重大な情報を知る方法がない。伝説、伝聞、噂は、新聞、出版、言論、集会、結社などすべての自由を奪われた民衆の特殊な権利である。噂は、いくら禁止しても逆に広く伝わるのは、社会背景を反映してのことである。

広西省の食人事件が全国的に噂になったということは、本質的にはそれが真実であり、信じら

れることであつたことの証明である。大衆はそれを信じ、伝え、しかも誇張して、高度に抽象化していることも、その社会背景が反映しているものに違いない。表面的に見ると、広西殺人・食人事件は、まさか、全く信じられないような噂であり、荒唐無稽な伝聞であるように見えるが、実際に調べてみると、それは決して噂ではなく真実だったのだ。

われわれ中国人の社会では、現実的にはどこでも、いろいろな噂に満ちあふれている。テレビ放送、新聞、映画、いろいろな会議、広告、政府の広報、商品、さらに大学の教室、法廷、経済統計、内部資料、建設工事などなど、すべて真実かどうかという問題がある。それも噂の生まれてくる背景に違いない。ただわれわれ中国人の国は、二つのことだけが真実である。つまり新聞の発行日と噂だけが、かならずしも嘘ではないということだ。

しかし、一つだけ重要な問題がある。私は未確認の情報、あるいは噂があるからといって、王文留が男性性器を食べた事件を肯定するわけにはいかない。

彼女が人肉を食べた年齢を考えると、当時の私と同じ十八歳であつた。私自身、青年フーズムの熱狂的な精神にあふれていた。さてこの伝聞、この噂が広く伝えられ、彼女もある程度、非難を受けた。それなりの譴責をも受けた。私の筆はきわめて重い。この本の中で私が書いたり、消したりしたすべての字は、一行一行は、厳しい法律にも道德的にも責任を負わなければならぬ。私はただ率直に知っていることを書き、確証したものを書く。それ以外に別に選択できるも

のではない。ただ、願わくは、読者諸君が本書を読み、彼女に対して、ある程度の理解と同情をお願いしたいだけだ。

3章

《人肉宴会》大流行

●暴君の統治下の愚民は、暴君よりもさらに凶暴だ



桐嶺中学・黄副校長の遺児・黄啓文・啓玲兄妹

「鄭義という人物には、関係資料閲覧を禁止する」

ある民間関係者が伝えてきた情報によると、私に関係資料を見せないのは、武宣県政府側のみずからの決定ではなかったという。私が武宣県に着くまえ、上部機関から電話連絡で、鄭義という人物には、絶対に関係資料を閲覧させてはならない、という指令であったそうだ。いったい、どういう問題が起こったか、全く不明である。私の気持ちは、再び緊張してきた。いったい、どこから来た電話であろうか。関係者の話でははっきりしない。しかも電話指示によると、私に対して秘密を守らなければならぬという。いったい、どういうことが起こったかは、すべてミステリアスで計り知れない。

私は緊張して、考えてみたり、推理してみたりして、結論としては、彼らは、私に対して大いに警戒し、しかも電話内容について漏らしてはならないということが本当なら、彼らは明らかに、私が事件内容を把握するのを恐れているらしいということになる。彼らは私を恐れている以上、私は決して彼らを恐れてはならない。そこで、私は南寧市の友人に電話して、この奇妙な電話を調べてくれるようお願いした。そのうえで、できるだけ各方面と連絡しながら、私は取材活動を続行し、飛び回ることにしたのである。

私は再度、県裁判所に行き、資料閲覧を請求した。このまえ、裁判所に行ったとき、裁判所側の話によると、資料管理をやっている人間が留守だったので断わられた。そのときは、それは本当なのだと思った。しかし、こんどもそれから数日後のことなのに、前回と同じように留守だと言われた。そこで、私は県整党事務所に行つて、車を申請した。文革中で学生たちに食われた桐嶺中学副校長の父親、黄有珉（おうゆうみん）に会いたいと思つたのだ。しかし、私は県整党事務所まで半日待つて、昼ごろになってやっと劉副主任が来て、車はすべて出ているので、今日は使えないと謝りに来るような状況だった。私は彼らにやられたと思つた。私は県整党事務所を離れ、これからは武宣県政府関係者とはいかなる連絡もしないと考えた。私は「君たちは絶対、そんなことを封じ込めることはできない」と自分に言つて聞かせた。

副校長が教え子たちに食われた事件は広西自治区だけではなく、全国的にも大きな事件である。私はかならずすべての可能性を信じて、資料を集めなければならぬ。一つの遠回りの方法ではあるが、黄副校長の子女を取材する道があつた。黄副校長は幸いにして、一人の息子と一人の娘が今日なお武宣県にいるのだ。

中学校副校長は、なぜ教え子に食われたか

私はある日の午後、県営百貨店に行つた。買い物客を装いながら、あつちを見たり、こつちを見たりしていた。黄校長の娘はこの百貨店の店員だった。しかし、若い女性は何人もいるので、だれが黄副校長の娘だろうか。私は売り子の顔を一人一人見ながら推測していた。たぶん、あの

女性に違いないと推測しながら、ある中年の店員に軽い声で尋ねた。「黄啓玲^{けいれい}さんは、いらっしやいますか」。彼女は、指で向こう側の女性を指した。私はゆっくり向こう側の売場に行き、録音機の小さな乾電池を指して声をかけた。

彼女が乾電池を取り出したのを見て、私は新聞記者証を取り出しながら、小さな声で彼女に「父親のことを調べに来た」とささやいた。彼女は最初、驚いた表情をしたが、私は知らん顔をしなげに、彼女に今晚、彼女の兄さんと一緒に来るように誘った。彼女はパチッと目の合図で了解したと知らせた。私は百貨店から出た。考えてみると、武宣県の人々もかなり地下活動のノウハウを知っているらしい。

その日の夜、兄と妹二人が約束どおりやって来た。彼らは、腰かけてからジュースも飲まず、たばこも吸わず、ただ兄妹二人がじっと私を見つめているだけで、疑問を抱いているようだ。私はまた新聞記者証を取り出して、兄の黄啓文^{けいぶん}さんに確認してもらい、その後、ゆっくりと会いに来た目的を説明した。兄妹二人はやっと納得して、ゆっくりと彼らの人生でもっとも悲痛な悪夢を語ってくれた。

……当時、黄啓文は十歳、啓玲はやっと五歳だった。父親が批判闘争にあった後、一家は桐嶺からふるさととの立志村^{りつし}に戻った。しかし、やはり批判闘争ゆえに、母親は半日の仕事しかもらえなかった。生活は非常に苦しくて、部屋もなかった。一家はやっとおじの牛小屋に住んでいたぐらいだった。

村人は、父親を桐嶺中学校で監禁し、一カ月あまり批判闘争を続けた。毎日、黄啓文が食事を届けていた。子どもの目から見ると、父親は、古傷がまだ治っていないうちに、新しい傷を加えられるように殴り続けられて、歩くことさえできないようだった。

情勢がだんだんと緊迫して、父親はもうこの厄難を逃れることができなくなったと観念していたようだった。母親は当時、古い友人に頼んで釈放工作をした。その人は隣村で革命委員会委員をやっていたので、ある程度、効き目がありそうだった。しかし、命だけでも保証してもらおうよう工作したが、母親が帰ってきてがっかりしているので、子どもたちでさえ、もう救われることはないかなと思つたという。そのとき、一種の抵抗しがたい恐怖に襲われ、だんだん、その恐怖が近づいているようにも感じられたという。

やがて父親の悪いニュースが入ってきた。父親は殴り殺され、肉まで食べられたのだ。子どもは母親の涙を知っている。残酷すぎる世の中のこともわかつていた。生産大隊は、子どもを学校に行かせなかった。黄啓文は四年間、牛飼いをやった。彼にとって、牛飼いは安楽な暇つぶしの生活ではなかった。ときどき、殺害の影が迫り襲ってくるように感じられた。

子どもを殴ることは、同じように残虐である。あるとき、小学生たちが彼にバケツを提げて壁の古いスローガンと、壁新聞をきれいに洗うように命令した。そして、幹部の子弟たちは、二、

三十名の小学生を連れて、先に用意した牛用のむちで彼を殴ったので、殺されそうになった。そのとき母親が通報を聞いて駆けつけて来て、人の群れを割って血だらけの彼を救い出し、やっと死亡をまぬがれたという。彼はもうそれ以上、命が危ないと思って、いとこのおじとともに海南島まで逃げて行った。そこで土を掘り、石をたたき、塩の包みを担ぎ、重労働をしていた。海南島に行ったときは十四歳で、父親が名誉を回復してから、彼がやつとふるさとの武宣県に帰ってきたのは、十年後のことであった。

妹の啓玲は、彼女の小さいころのことを思い出しながら、話をしてくれた。彼女は当時、まだ世間の恐ろしいことを知らなかった。五歳からよく殴られ、蹴られ、学校へ行った後も、まわり子どもたちはよく彼女をからかい、ののしった。裏切り者の娘だと彼女を追っかけて、殴ったり、金を奪ったり、本を破いたり、鉛筆を折ったりして、子ども式の残虐の仕打ちもきわめて恐ろしいものであった。

彼女は逃げ場がないので、その恐怖が小さな心を痛めつけ、そのために心臓病になった。彼女はいつも泣いて学校へ行きたくなかったが、母親が彼女を学校まで送りとどけた。学校は当時、よく勤労活動をやっていた。彼女は心臓が悪いのに、よく先生に仮病だと叱られた。彼女はそのような環境の中で育ったのである。その幼い命は、重ねての残虐な周囲の仕打ちに耐え、時代の重い荷物を背負いながら生き、成長していったのである。

妹は、話が悲しいところまで来ると、頭を下げて、うつむいたまま何にも話せなくなった。兄のほうは絶えず涙をふきながら、黙って聞いていた。十年間の逃亡生活は、彼を強くたくましく、がっちりした体つきに育てた。そのため、彼の涙は案外と人の同情を誘ったが、私の心はずでに麻痺していたので、相変わらず残虐にもこの二人の苦痛を根ほり葉ほり聞き続けていた。

妹の話によると、当時、学生が奪権闘争の後、父親の肉を食ったのだが、なぜか現在でも、とくに彼ら兄妹を恨んでいるという。彼女は地方のなまりが強いので、私は兄さんにもう一度、北京語で翻訳してもらおうように頼んだ。そのとき、私は愕然とした。私が不思議に思うのは、私がどうしても理解できないのは、人間は罪を犯したとき、恥ずかしくて、良心の呵責を受けはずだ。

しかし、武宣県の土地柄かどうかはともかく、彼らがかえって兄妹を恨んでいるということは、どうしても理解できないのだ。なぜ、そんな恨みがあるのか。人間を殺してその人肉まで食い、それ以上に、今日もお食った人間の家族を恨んでいるとは、それは何たることなのだ。

中学校副校長の批判糾弾大会

……一九六八年七月一日夜八時、黄家凭副校長の批判糾弾大会が桐嶺中学校第十組の教室で行なわれた。同校の革命準備委員会・謝東副主任がこの集会を指導し、発言をした。批判糾弾は